
灼熱の氷

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灼熱の氷

【Nコード】

N8069Q

【作者名】

凧

【あらすじ】

社交界きつての美男子ラザフォード伯爵は新しい妻を探しているらしい。

伯爵の義妹の家で家庭教師をしているエミリアは、メイド達の噂話を遠巻きに聞いていた。初めて伯爵に会った時、冷たいグレーの瞳で見下ろされたことを鮮明に覚えているエミリアは、氷のように冷たい伯爵様の一体どこがいいのかと不思議に思っていた。

名のある貴族の令嬢を呼んだ婚約者を決めるパーティーで、最後に

ラザフォード伯はある女性の手に口づけてこう言った。

「エミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になってください」

19世紀イギリスが舞台のヒストリカルロマンを目指して書いていきたいと思っています。

プロローグ

「何か不都合はなかったか」

5日ぶりに屋敷へ戻ったマグナスは執事のネルソンに外套を渡しながら尋ねた。

暗い色の髪は雨の所為で湿り気を帯びており、彫刻のように整った顔には僅かな疲れが滲んでいた。

ロンドンからの帰路は決して快適なものではなかった。イングリンド特有のどんよりとした雲は、相も変わらず気紛れに雨を降らせる。ぬかるんだ道に馬車の車輪が嵌り、その為予定よりも帰りが遅くなってしまうた。

マグナスが何度も懷中時計を開くのを、御者の男が情けないほどに怯えていたのも苛立ちの原因だった。

ラザフォードの邸を留守にすることは珍しくない。爵位を継いでからもう幾度となくロンドンと領地を行ったり来たりしている。

ロンドン滞在中は気紛れに口説き文句を使ってみたり、友人たちと夜通し酒やカード遊びに熱中するのが常であった。

留守を任せるにあたり、マグナスはネルソン以上に適任者はいないと思っっている。

マグナスが幼い頃からこの邸に仕えている穩やかな執事はあの頭の固い父親でさえも一目を置いていたし、友人であるキングスリー侯は度々彼を冗談交じりにスカウトしていた。

寸分の隙もなく整えられた服装に、後ろに撫でつけられた髪。それはマグナスが彼を知ってから全く変わっていないことだった。

「いいえ、旦那様」

礼儀正しく帰ってきた言葉ではあったが、返答までの僅かな時間で何かしら不都合があったことを悟る。それに思い当たるただ一つの理由も。

「…ダニエルか」

僅かな溜め息と共に紡いだ息子の名前。今のマグナスにとって唯一の頭痛の種であった。

妻はダニエルを生んですぐに亡くなった為、ダニエルは母を知らない。

しかし、貴婦人の多くは子供を乳母に預け、自分は連日パーティーやオペラの鑑賞に勤しむのが普通である。子供が年齢を重ねれば、その仕事は乳母に代わり家庭教師が担うこととなる。

彼女たちは母親であることよりも貴族の夫人である方が大事なのだ。その為サリアナを失くしてから数年、後妻の必要性を感じてはいなかった。

今年3歳になる息子は普段は大人しいものの、ふとした瞬間に酷く癇癪を起こす。誰が宥めようともしずには治まらず、屋敷中の使用人を悩ませていた。

初めは乳母が大袈裟に言っているだけだと取り合わなかったが、最近では子供には母親というものが例え飾りであっても必要なものかもしれないと思うようになっていた。

少なくともマグナス自身幼い頃にそう感じたことは一度も無かったが。

結婚という二文字は決してマグナスを楽しませるものではなかった。亡くなった妻、サリアナも親同士が決めた結婚であったため、愛どころか情すらも移ることはなかった。

ただ未来の妻だと言われた女に会い、結婚し、グランヴェル家の後

継ぎを儲ける。ダニエルが生まれた時、これでもう伯爵としての役目は果たしたと安堵したのに、だ。

まったくもってサリアナがお産と共に亡くなってしまったのは計算外であった。

それでも勝手を知る乳母や執事に息子を任せ、どうにか3年はやってこられたのにまたもや予想外の出来事だ。せめてあと4、5年経っていれば寄宿学校にでも入れられたのに。

考えただけで胃が重くなる。あの忌々しい結婚とやらをもう一度繰り返さなくてはいけなくなるとは。

しかし、このまま放っておくわけにもいかないだろう。

暫く考えを巡らせた末、思いついたのはベッドフォードシャーに住んでいる義母のことだった。マグナスの実母が亡くなった後父の後妻に入った女だが、父が亡くなると同時に実家のあるベッドフォードに生まれたばかりの娘と一緒に帰っていった。

尤も、マグナスの父と彼女が婚姻関係にあったのはほんの数年のことでその間マグナスはグラントツアーに出かけていた為、殆ど義母と言葉を交わした記憶も無いが。

彼女も社交界の華だった一人だ。勿論顔も広い。

少々面倒ではあるが、手紙を出し結婚相手を決めるように取り計らってもらうことに決めた。

何かと世話を焼きたがる義母は喜んでその申し出を受け入れてくれるだろうから。

マグナスは自身が愛情を持った人間でないことを知っていた。

彼の両親がそうであったように、彼もまた愛というものをまるで信じていなかった。マグナスにとって愛を語るのとは一夜の駆け引きに使う言葉で充分であった。

生きていく上で不要だと感じてても必要だと思ったことはない。

妻に求めるのはダニエルの母親になる資格だけだ。

伯爵家の家名を汚すような女では困るし、愛など求められても応えるつもりはない。

甘い言葉を求めない従順で大人しい女、ダニエルはサリアナの髪の色を受け継いでいるから金髪がいい——この国に一人ぐらいはいるだろう。

「義母上に手紙を出す。用意を頼む」

「畏まりました旦那様」

階段を上り、真っ直ぐ自室へ向かう。

慣れ親しんだこの部屋だけが唯一マグナスの心を穏やかにさせた。一流職人の手で作られた芸術品のような椅子に疲れた体を沈ませ、首元を締めていたクラバットを緩める。

考えなければならぬことがあり過ぎて痛み出したこめかみをゆつくりと揉むが、痛みが和らぐことはなかった。

——マグナスにはその胸の奥に幾重にも錠を掛けた秘密があった。決して誰にも知られてはならぬ秘密が。その秘密の為に後妻など向かる気は更々なかったのに。

まったくもって、何もかもが計算外だ。

苦々しげな溜め息は誰もいない書斎に重苦しく響いた。

エミリア・アンダーソンがベッドフォードにあるここ、チエザースハウスに来てもうすぐ一年になる。

両親を亡くしてから一体どうやって生活しているかと悩んだが、知り合いの牧師が紹介状を書いてくれたおかげで名門と名高いラザフォード伯爵の別邸に勤めることが出来た。

気のいい女主人と、天使のように愛らしい令嬢。ロンドンのような喧騒はなく、ひたすら静かで穏やかな日々であった。

使用人でもない家庭教師という立場は時としてとても居心地が悪いものだが、ここに仕えているメイド達はみなエミリアによくしてくれた。女主人は必要以上の使用人を雇わない為、使用人同士の絆は強く良好な関係を築いていた。

そのことをエミリアはとても幸せに思っていた。持参金も持たない自分は恐らく一生独身のままだろう。だから生徒であるレティシアが立派な淑女になるまでは全力を尽くすつもりであった。

いつものように襟が詰まっているモスグリーンのドレスを身に着け、長い金髪を後ろ手に編み込む。ここ一年ほど同じ動作を毎日繰り返ししている為か、支度をする手際はよく、無駄がない。

童顔の上に身長もあまり高くないエミリアはよく実年齢よりも下に見られるが、解くときに痛いほどきつちりと髪を結えばそれもある程度は隠せることを知っていた。

割り当てられた部屋は日当たりも良く、そこそこの広さがある。尤も、その広さを有効に使えるだけの荷物を持たないエミリアにとつては、些か居心地が悪いようにも思ったが。

クローゼットの半分にも満たない衣服と父の形見である数冊の本、

それから母から受け継いだカメオのブローチだけだ。

母が結婚するときに父から貰ったと言うそれは、決して貴族が付けるように繊細なものではないがどこか温かみがあるものだった。

母は時折引き出しの奥からそれを出しては暫く嬉しそうに眺め、そしてエミリアに父との出会いを話す。どこかロマンスめいたその話は聞く度に父親像が変化していくので、父は顔を赤くして母を止めていたが、エミリアにはどのお伽噺よりも素晴らしく思えた。

今でも両親のことを思うと胸が痛む。それは生涯変わらないであろう。

「でも今は両親のことを思い出している時ではないわ」

言い聞かせるように、鏡に映る自分にそう言った。

そう、今やるべきことは自分を雇ってくれた主人に報いることだけだ。

*

廊下に出た瞬間、屋敷全体が何やら浮足立っているのをエミリアは感じた。

人のいい女主人が切り盛りしている為、普段から重苦しい雰囲気はないがそれでも今日はいつも以上だ。

（何か、あったのかしら…）

レティシアの誕生日はまだ先だし、大きなパーティの予定も入っていないかった筈だ。

そんなことを考えていると、丁度向こうから馴染みのメイドが走っ

てくるのが見えた。両手に何やら抱えてとても忙しそうであったので一瞬声をかけるのを躊躇ったが、向こうもエミリアに気付き興奮したように近寄ってきた。

「エミリアさん！おはようございます」

「ええ、おはようございます。それより随分と忙しそうですね」

さりげなくそう切りだせば、メイドのリーザはええ、といくらか頬を紅潮させながら言った。

「つい先ほど旦那さまからお手紙があったのです」

「旦那様…？というと、ラザフォード伯爵様から？」

それ以外旦那様という人物に心当たりはないのだが、エミリアは思わず聞き返していた。

何しろラザフォード伯はエミリアが覚えている限り、一度もチェザースハウスに宛てて手紙を寄こしたことなどなかったのだ。

例え義理ではあっても血の繋がった妹や母は気にならないのかといつも不思議に、そして時には不満にも思っていたのだが、一介の家庭教師が進言する権限などない。

義母であるこの女主人も、妹であるレティシアも大して気にしている様子もないところから上流階級に属する貴族はそういうものなのだとい己を納得させていた。

そのラザフォード伯爵がこちらに手紙を寄こしたのは新鮮な驚きであった。

「ええ。なんでも新しい奥さまを探していらっしゃるそうですね。それでこちらで婚約者を決めるパーティーが出来ないかと」

——新しい奥さま？

楽しそうなリーザとは正反対に、エミリアの頬は完全に引き攣っていた。

ラザフォード伯爵、マグナス・グランヴェルが先妻をお産の際に亡くしたというのはエミリアも知っていた。

その話を初めて聞いた時は伯爵に深く同情した。きっと愛する奥さまを亡くされてとても落ち込んでいらっしやるだろうと。

お産で命を落とす女性は少なくない。きっとこれから先、どんなに医療が発達したとしても100パーセント安全な出産などないだろう。

ラザフォード伯爵が後妻を娶ることになんら問題はない。

しかし、しかしだ。先妻が亡くなってまだ3年も経っていないだろうと記憶しているエミリアには、到底理解出来るものではなかった。

ふと、始めて伯爵と会った時のことがエミリアの脳裏に浮かんた。

ここで雇われるにあたり、主人である伯爵に先ずお目通りをということと伯爵領であるラザフォードまで行ったことがあった。

城と見紛うばかりの立派な屋敷を見た途端、エミリアはおもわず帰りたくなった。名門のグランヴェル家に仕えることが出来るのはとても名誉なことだったが、想像していたよりも豪華な邸は家庭教師になりたてのエミリアを威嚇しているようにも思えたからだ。

それでも何とか物腰の柔らかい執事に連れられ、伯爵の書斎へと通された。

あまりに緊張していた為、自分の名前すらきちんと言えたかどうかも疑問だったがあの瞬間のことは今でも鮮明に覚えている。

伯爵は窓辺に立っていた。庭園が一望できるような大きな窓と深紅の生地に金の刺繍が施されている豪華ではあるが落ち着いたカーテ

ン。

一流の仕立てによる服を着たその後姿は、こちらが恥ずかしくなるほど真っ直ぐであった。

執事がエミリアが到着したことを告げると、伯爵はやっとこちらを振り返った。今まで見たことのない美貌にはっと息を飲む。

硬質そうな黒い髪、ギリシア彫刻のように整った容姿、背はすらりと高くそれでいて貧弱な感じは少しもない。寸分の隙もないほど完璧な服装は、仕立屋が大いに喜んだらうと思うほど彼に似合っていた。

エミリアはその時おもわず、着ている流行遅れの野暮ったいドレスが今だけ最新の美しいドレスに変わらないかと願った。

「お、お目にかかれて光栄に思います伯爵様。レティシア様の家庭教師となりましたエミリア・アンダーソンと申します」

おずおずと名前を言い、精一杯勉強を教えることを伝えたが伯爵から返事が返ってくることはなかった。

緊張のあまりそんなことを気にする余裕も無かったが、退出する為顔を上げたエミリアは伯爵のあまりに冷たい瞳に足が竦んだ。

グレーの瞳は何の感情も宿さずにエミリアを見下ろしていた。しかしそれも一瞬のことで、すぐに視線は外される。

ピンと張った背中をエミリアは呆然と見ることしかできなかった。

ただ、仮にも一番近くで自分の妹を見るであろう家庭教師に、伯爵は何の興味も湧かなかったことだけは分かった。

遂にそのたった一度の機会ですら、伯爵と言葉を交わすことはなかった。

——まるで氷のように冷たいお方なのだわ。

あの時と同じ感情でエミリアはそう思う。そしてまだ見ぬ後妻とな

る夫人にほんの少しの憐みを感じていた。

それに、3つになるかならないかのご子息様は新しい母親の事を一体どう思うのだろうか。

貴族にとって当たり前だと言われればそれまでだが、エミリアは未だに幼い我が子を乳母に預けて夜会に繰り出す貴夫人たちを理解できずにいた。

自分が子供の頃を思い出すと、両親が不在な時はとても寂しく不安だったからだ。両親を見ていると尚更そう感じる。

（あんなに立派なお屋敷に住んで毎日の生活にも困らない人たちのだろうけれど、もしかしたら家族の愛を知らないのかも知れないわね…）

エミリアがそんなことを考えている間にもリーザのお喋りは止まらなかった。

「きっとイギリス中の未婚女性がここに集まりますわよ」

だとか、

「こうしてはいられないわ！普段使っていない客間を綺麗に掃除しなくては！伯爵様の恥になるようでは困りますから！」

だとか。

次から次へと可愛らしい口から飛び出す言葉に、苦笑いが零れる。

メイド頭であるアンナの怒号が屋敷中に響くのも時間の問題だろう。

嵐のように去っていったリーザの後姿を見ながら、恐らく今日の勉強の時間は大分削られるだろうなと予想する。

何しろ今玄関から入ってくるのは、女主人とレティシア嬢の新しいドレスを作る為の仕立屋だからだ。

エミリアもレティシアの家庭教師としてその素晴らしいパーティー

に出席するだろう。

その時自分が着る服は一体何にすればいいのかと、途方に暮れた。クローゼットに入っているのは紺色と若草色、それと褪せた黄色の、それもとくに流行など過ぎてしまった型のドレスだからだ。家庭教師としては問題ないが、夜会に出るにはあまりに粗末過ぎる。伯爵家には恩がある分、来客に笑われるような恰好をしてはいけないのだとは分かっているがそれも難しいだろう。

（いつそリーザ達と同じようにメイド服に身を包もうかしら）

やがて来るであろうその日を思うと、エミリアは胃の辺りがとても重くなるのを感じた。

伯爵から手紙が届いてから数日、エミリアが伯爵の名前を聞かなかったことはなかった。

どこへ行っても話題は伯爵へ移りその容貌の美しさから、彼の華麗なる女性遍歴までエミリアは聞かされる羽目になった。

メイド頭にお客様の噂話をするのを慎めと嗜まれても、彼女たちはまるで示し合せているかのように集まっては色々な噂話に華を咲かせていた。

メイドたちがまるで英雄物語でも語る様な口ぶりで話す伯爵の立派な経験は、エミリアの伯爵に対する意識を更に悪くするのに最適であった。

一方、妹であるレティシアは何年も手紙一つ書かなかった伯爵を責めるどころか、彼がいかに素晴らしく、知性に溢れているかを熱弁しエミリアに軽い眩暈を覚えさせた。

一体伯爵のどこをどう見たらそういう結論に達するのかと心配する程、エミリアの知る伯爵とレティシアの語る伯爵とでは差があったのだ。

エミリアが知る限り、レティシアが生まれた時伯爵はグランドツアの真つ最中であつたし、彼が帰って来る頃には前伯爵が亡くなりレティシアは母と一緒にこちらに来ていた筈だ。

きつと心の中で理想の兄の姿を描いているのだらうと思うと、深くレティシアに同情し、それと同時に一度も会いに来なかった伯爵に強い怒りを覚えた。

だからエミリアは、レティシアが伯爵の話始めた時は勉強を一時中断して耳を傾けることにしたのだ。

尤も、主人たちのドレスの新調や客室の掃除に駆り出されたお陰でもともと勉強がはかどるような環境ではなかったのだが。

レティシアの空色の瞳が何かを思い出しかのように嬉しげに細まり、ペンを持つ手が止まるのを確認してエミリアも持っていた本を置く。今日のフランス語の授業はここで終わりだろう。伯爵から手紙が来てからたった数ページしか進んでいないことに気付き、エミリアはそつと溜め息をついた。

これが伯爵に知られ、職務怠慢として減給されなければいいが。減給ならばいい方だ、最悪なのは職を失うことだ。

紹介状も持たない家庭教師が新しい勤め先を探すのは決して容易ではない。そうでなくても家庭教師という職業は中流階級の女性が唯一レディとしての対面を保てるものの為、数が多すぎるくらいなのだ。

「ねえ、先生、聞いてくださる？」

そんなエミリアの心配を余所におおよそ子供らからぬ大人びた口調でレティシアは始める。

「なにかしら」

「お兄様の新しい奥様ってどんな方になるのかしら」

——きつと傲慢で、舞踏会や夜会が大好きで、子供の世話など死んでもしたくないと思ってる人よ。

心の中でそう思ったが、まさか口に出すことは出来ず「どうかしらね」と曖昧な返事を返した。

「素敵な人だといいわ。お兄様の前の奥様とはお知り合いになれなかったけれど……私きつと、新しいお義姉様を好きになれると思うの」

きつと、おそらくレティシアの淡い願いは叶うことはないだろう。

けれどわざわざそれを教えて落ち込ませることはしない。エミリアはそつとレティシアの左手に自分の右手を重ねた。そして話題を逸らす為に極めて明るい声でこう切り出した。

「さあ、レティシア。窓の外を御覧なさい。あなたの新しいドレスを作ろうと、今日も仕立屋がやってきたわ」

その一言にレティシアは喜びの悲鳴を上げ、窓の傍に近づいて行った。

丁度、この数日間ですつかり馴染みとなった仕立屋が真鍮で造られたドアノッカーを叩いているところであった。

*

ラザフォード伯マグナスが招待客より一足早くチェザースハウスに着いたのは、夜もそろそろ更けて来た時であった。

馬車から下り、長旅であちこち体が軋むのが分かったがいつものことだ。馬丁に手綱を渡すと、半ばうんざりとした目で目の前の邸を見た。

まさかここに来ることになるなろうとは。しかしそれも花嫁を見つける為のほんの数日のことにすぎない。

出来るだけ早くダニエルの母となるべき人物を見つけ出し、ラザフォードの屋敷に戻るだけだ。

マグナスは玄関へ通じる階段を踏みしめるように上った。

エミリアはその時、レティシアを寝かしつける為に子供部屋にいた。今日はいつもよりも時間がかかってしまった。レティシアは兄に会

うのが嬉しくて堪らないらしく、いつもよりも長くエミリアに伯爵の素晴らしさを語っていたのだ。

初めは律義に相槌を返していたのだが、いつまでたっても終わりが見えないと悟るとレティシアの髪を優しく撫で、一刻も早く眠りについてくれることを願った。

その願いが通じたのか、数分後に安らかな寝息が聞こえた時は心の底から安堵し、いつも以上の疲れを感じている体を引きずって自室に戻る前の事であった。

玄関ホールが騒がしくなったかと思うとバタバタと人の足音が聞こえ、それから女主人であり、マグナスの義母でもあるメッリッサの明るい声が響く。あくまで、楽しそうな声を出しているのはメッリッサだけなのだが。

そのまま階段を下りるのも躊躇われ、エミリアは無礼だとも思ったがその場に立ち尽くしそつと様子を窺った。

僅かに見えた伯爵の顔は、覚えているよりもずっと美しかった。彼の少し憂いを含んだ横顔は、メイドたちが噂するようにイギリス中の女性たちを虜にするだろう。それこそ既婚者も未婚者も関係なく

「ああ、マグナス！待っていたのよ！何年ぶりかしら？変わりはなくて？」

親しげに腕を伸ばし抱擁しようとするメッリッサをマグナスは冷たく一瞥し、まるでお手本のような礼を取った。

「お久しぶりです義母上。このような時間になってしまい申し訳ありません」

「いえ…いいのよ。長旅で疲れたでしょう？すぐに部屋まで案内させるわ」

メッリッサとマグナスの間には、まるで幾重にも壁が掛かっているよ

うにエミリアは感じた。それも、彼の方が一方的に立てている。それはメリッサも感じたことなのか、先ほどの嬉しそうな顔から一転し、今は何とか笑みを作っているように見えた。

女主人に呼ばれてポールという名の執事がマグナスに頭を下げる。ポールは結構な歳ではあったが優しく、この邸に来たばかりのエミリアに親切にしてくれた使用人の一人であった。

エミリアはポールの朗らかな人柄が大好きなのだが、一瞬彼の眉が顰められたのをエミリアは見逃さなかった。

どうやら伯爵様はポールの決して素早いとは言い難い動作がお気に召さなかったようだ。

——まったく、なんて人かしら。

誰も見ていないのをいいことに、エミリアは内心の苦々しい思いをおもいつきり顔に出した。

メリッサに対する態度も、執事への視線もなんて冷たいのか。

そもそも自分の出した手紙一つで、ここの屋敷中の使用人がどれほど大変な思いをしているのかも彼には全く関係のないことだろう。

パーティーに呼ぶ客——つまり、未婚の女性たちのことだが——すらメリッサが決め、招待状を出したのだ。

伯爵がすべきことと言えばこのパーティーの為に惜しみも無く費用を出し、呼ばれた女性たちの中から相応しい姫君を見つけることだけ。

義母と妹の気持ちなど、きっと微塵も汲みとっていないに違いないのだ。

と、エミリアがそこまで思った時、マグナスが急に視線を上げ階段の上にいるエミリアをその視界に捉えた。

エミリアが慌てて頭を下げるのと同時に、マグナスがメリッサに「誰だ」と聞いているのが聞こえた。

「レティシアの家庭教師をなさっているミス・エミリア・アンダーソンよ。去年お会いになったのではなかったかしら？もう一度紹介しましょうか？」

マグナスはメリッサの申し出を断りぼんやりと記憶を辿ったが、メリッサの言う昨年に彼女を見た覚えはなかった。

幼い顔に御世辞にも似合っているとは言い難い、きつく束ねられた金色の髪。薄茶色の瞳はマグナスへの興味を隠そうとせず、瞬きをする度それが増しているようにも思えた。

しかしそれは社交界の多くの女性が自分に向けてくる何かを含んだようなものではなく、どこか嫌悪されているような視線であった。だいぶ流行遅れの深い藍色のドレスは彼女の襟や袖まですっぽりと隠しており、余計に野暮ったく見える。

——自分が知る女性が見たら馬鹿にしたように笑うか、悲鳴を上げるな。そう思つて初めて、マグナスはエミリアを注意深く観察していたことに気付いた。

「部屋へ案内してもらおうか、ポール」

さつとエミリアから視線を外し、マグナスは執事へと向き直った。その硬い声に、ポールは今までにないくらい俊敏に動いた。マグナスの為に用意された客室の中でも一番上等な間は廊下の奥にある。

「それでは失礼する。義母上、ミス・アンダーソン」

先ほど探る様な不躰な視線を向けられたエミリアは暫く言葉を失っていたが、現実に戻った時には既にマグナスの後姿は小さくなっていた。

シーズン外で、しかもロンドンではないにも関わらずハウスパーティーと銘打ったその場には結構な人数の男女が集まった。

別邸がなかなかの広さを持つホールにはメイドが始終忙しそうに給仕に走り、招待客は噂話や自慢話に花を咲かせる。

会場にはゆったりとした音楽が流れ、幾人かは手を取り合い音楽に合わせて踊り始めた。

その中心で未来の花嫁になろうかという女性たちに囲まれながら、マグナスの怒りは静かに、そして確実に頂点へ向かおうとしていた。余計なことを口走らない為に飲んでいた大して美味でもないワインは既に4杯目に差し掛かうとしている。

何しろ女性たちの話題を言えば、流行のドレスはどこそこの仕立屋が一流だとか、身につけている宝石の値段や貴族の噂話ばかりで少しも興味をそそらない。

その上、事あるごとにマグナスに向けられる意味深な笑みや押しつけられる豊満な体にもうんざりであった。

マグナスは早くも自分の失態に気付くこととなった。

確かに義母には結婚相手を探す手伝いをして欲しいと手紙に書いたが、ダニエルの母親を探す手伝いをして欲しいとは書かなかったのだ。

集まった令嬢たちは確かに名のある貴族ばかりであったし、美しさも充分であった。しかし欲しいのは子供への愛情だ。

マグナスが持つ広大な領地、それから莫大な財産に、所有する全ての邸を賭けてもいい——この中にダニエルの母親に相応しい令嬢は誰一人としていない。

美貌も持参金も、家格もいらない。必要なのはしっかりと子供を育

てられる女だ！ マグナスは胸中で悪態をつきながらグラスに残ったワインを飲みほした。

この苦みと酸味が全ての苛立ちを消してくれることはないと言っていても。

しかしそんなマグナスの心中とは裏腹に、女性たちは次々と話題を変えていきマグナスと少しでも話そうと躍起になっていた。

「ラザフォード卿の庭は素晴らしいと聞きましたわ」

リッチモンド侯爵令嬢——名は紹介された気がしたが、既に記憶にはない——が演技がかった口調でそう切り出すと、周りにいた他の女性も一斉にマグナスの方へ視線を向ける。

その媚を売る様な目にマグナスは笑みを返しながら、内心で嘲笑っていた。

実際、ラザフォード伯爵の庭はイギリス中でも5本の指に入るほど素晴らしいものであったが、例えこの場で庭が蔦と雑草に覆われたみすばらしいものだと言ったとしても、彼女たちは口々に賞賛の言葉を浴びせるだろう。

庭の様子など未来の伯爵夫人にとっては何の問題でもない。マグナスの持つ財力の方がはるかに魅力的だからだ。

「そうですね。私が妻を娶った際には是非とも我が屋敷へ。妻の話し相手にでもなっってくださいと嬉しいのですが」

暗にこの中にいるどの女性とも結婚する気はないとほのめかし、マグナスは呆然としている令嬢たちから新しいグラスをとってくると言い離れた。

それまで遠目にマグナスと令嬢を見ていたメリッサの眉が攣り上がったが、マグナスの関知するところではなかった。ただ一つ言えることは、あと1分であってもこの場にいることは耐えられそうにな

いということだけだ。

できる限り早足でテラスへと向かう。噓せ返るような香水の匂いばかりを嗅いでいた所為か、ひどく新鮮な空気が欲しかった。

マグナスの気迫に押されていたのか誰もマグナスを呼び止めようとはしなかった為、案外すんなりとテラスまで出られたのは幸いであつた。

大きく息を吐くと、しばらく感じたことのなかった疲れが体中に押し掛かる。

背中越しにぼんやりと聞こえるワルツと、男女の笑い声。それがたった一枚のガラスの扉によって遮断されるのは、とても不思議な気持ちだ。

マグナスはほんの10分ほど休んでからホールに戻るつもりだった。ひどいパーティーではあったが、マグナスはダニエルの母親を探すことを諦めてはいなかった。

まだ数名、きちんと会話をしていない令嬢がいたはずだ。もっとも、その数人の中に花嫁となるべき人物がいるとも思えないが万が一という場合もある。

なるべく早く花嫁はみつけない。この際母親に相応しいかの基準は少し下げ、いかに夫に従順であるかを優先すべきか。

夫に従順であれば、ラザフォードの領地にダニエルと一緒に住むことに強くは反対しないだろう。大切なのは「ダニエル母親」という肩書きなのだ。

金輪際、婚約者を探すためのパーティーを開くのはまっぴらだ。女性たちの質問に対して答えを考えるのも、思ってもいない世辞を言うのも。

それらを使えば、今会場にいる軽薄な娘たちが従順で素晴らしい母親になるのならあちらがうんざりするほど並べ立ててやってもいい

が、残念ながらマグナスの鬱積が溜まるだけで少しの利益も見込めそうにない。

そんなことを何度も繰り返さなくてはいけないと思うだけでもぞつとする。

だから何としても今日、このパーティで花嫁を探す必要があった。

森の奥から吹く風がアルコールを含んだ体を心地よく通り過ぎていく。光も何もない空間ではあったが、心が落ち着くような気がした。丁寧に刈られた芝生の向こうにはひたすら森が続き、夜の静寂を時おり鳥の鳴き声が破る。

おもわず感嘆のため息が零れた。

「ねえ、先生。お兄様は喜んでくださるかしら」

「どうかしら。けれども立派な花束が出来上がったわね」

ふと下から聞こえた声に視線を落とすと、暗闇の中にぼんやりと浮かぶ光があった。

蠟燭の燭台を持った女が一人と――子供が一人。

それが妹であるレティシアだと気づくのに随分と時間がかかった。すると先生というのは、あの家庭教師のことか。

マグナスは妹の家庭教師だと紹介された娘を思い出した。確か名前はエミリア・アンダーソンといった。

彼女がパーティに出席するとは聞いていない。今夜招待された客は女性が多かった為、これ以上の女性客は不要だったのだ。

マグナスが見ているとも知らず、2人は楽しそうに笑っていた。

薄暗い為にはつきりとは確認できなかったが、レティシアのドレスは土で汚れお世辞にも淑女らしいとは言えない。それを教えるべき家庭教師もそんなことは構わずに、レティシアと視線を合わせるか

のように腰を下していた。

きっと彼女のドレスの裾も汚れているに違いない。その事実を想像し、マグナスは顔を顰めた。少なくともマグナスの知る家庭教師たちは、今の彼と同じような反応をするだろう。

しかし、エミリアだけは違ったようだ。レティシアが彼女に向って伸ばした泥のついた手ですら、笑顔で握りしめる。イギリス中の貴婦人なら悲鳴を上げて叱り飛ばすだろう行動を、だ。

レディにはあるまじき行為なのかもしれない。しかし不思議と嫌悪感は湧かなかった。

「ミス・アンダーソン」

気づいたらそう声を掛けていた。マグナスは自身の行動に驚いたが、エミリアはそれ以上だった。

短い悲鳴を上げ、視線を向けた先にマグナスの姿を確認するとまるで叱られる前の子供のようにバツの悪そうな顔をした。

既にレティシアがいるのも知られているのにも拘らず、彼女はそつとレティシアを背中に隠すことも忘れない。

だが次の瞬間には——ドレスに泥が付いていること以外——完璧なレディのように軽く膝を折り、マグナスに笑顔で挨拶をしていたのはさすがに感心した。

「こちらにおいでだとは存じ上げませんでした。このような恰好で……その、申し訳ございません」

「一体何をしていたのだ？」

途端にエミリアは口を噤まざるを得なかった。

パーティにレティシアは招待されていない。エミリアはメリッサにパーティに出てもいいと言われていたが、着るドレスがなかった為
に適当な言い訳をつけて断った。

いつもようにレティシアを寝かしつけようと部屋に入った時、レティシアにお願いをされてしまったのだ。

——お兄様のお嫁さんになる方に、花束を作って差し上げたい。

マグナスが屋敷に来てからというもの、レティシアは必死に兄と仲良くなるうと努力をしていた。食事のたびにドレスを変える姿や、いつ兄が部屋に入ってきててもいいようにいつも以上に勉強を頑張る姿は抱きしめなくなるほど愛らしかった。

しかし兄であるラザフォード伯爵は妹と親しくなるつもりは微塵もなかったようだ。

食事の時以外は仕事と称して部屋にこもっているか、馬に乗って森へ狩りに行ってしまふ。その為レティシアが招待した午後のお茶会に、マグナスは2度とも欠席した。

エミリアは呆れてものが言えなかったが、レティシアは諦めなかった。

少しでも兄を喜ばせたい。その一心があの子の言葉を言わせたのだとエミリアは知っている。

今夜はお忍びで庭に出るには絶好の機会であった。エミリアと他数名のメイドたち以外は全員パーティに出払っているし、そのパーティが終わるのは日付が変わった後だろう。

レティシアの期待に満ちた瞳の前で無碍に断ることもできず、2人はこっそりと部屋を抜け出し庭に降りてきたのだ。

夜に咲いている花などほとんどないが、切り花にして生けておけば明日の朝にはまた花を咲かせる。そうしたら花束にして伯爵に渡せばいい。

あの無表情な顔も少しは変化するのかと思うと少しだけ興味が湧いたし、花を摘むぐらいだったらそれほど時間はかからないと高を括っていたのがいけなかったのか。

よりもよって伯爵本人に見つかってしまつとは。

「私の記憶が正しければ妹はとくに寝ている時間だと思ふのだが」

何も答えないエミリアにマグナスは続けた。

妙な威圧感にぐくりと喉が鳴る。レティシアが不安げにエミリアのドレスの裾を掴んだが、大丈夫だと言うようにエミリアは優しくレティシアの背中を叩いた。

「よ、夜の授業をしていたのです。伯爵様」

エミリアの返答にマグナスの眉が上がる。

「授業？」

その声色には呆れたようなものも含まれていた。

エミリア自身も苦しい言い訳だとは思つたが、一旦口に出してしまつたものを撤回するわけにもいかない。

なるべく冷静に、いかにも有り得そうな風を装うことが一番だと思つた。

「ええ。夜にしか教えられないことはたくさんございます。もちろん、本から知識を得ることはとても大切なことですが、やはり実際の体験とは大きく違いますから」

マグナスは家庭教師の行動をじつくりと見つめた。

動揺している様子はない。寧ろこちらが驚くほど口調は冷静だ。

相も変わらずみすばらしいドレスは、彼女の肌を隠していたがレティシアを撫でる指先とほんの少しだけ襟元から覗く首筋は月明かりに照らされ、まるで真珠のように輝いている。

先日きつちりと結われていた金髪は今は少しほつれ、柔らかなウェーブを作っていた。

一見、華奢な体に見えるがレティシアを後ろ手に庇う姿は凜としていて隙がない。あの薄茶色の瞳は真っ直ぐマグナスを見据え視線を逸らそうとしなかった。

それはマグナスにとって初めてのことだった。

大抵の女はマグナスを見ると頬を染めさつと視線を逸らすか、上目づかいにこちらの反応を窺うかのどちらかであった。

これは大いに興味をそそる。

恐らく夜の授業というのはこの家庭教師が咄嗟に作り上げた嘘だ。

だが、彼女はレティシアを守る為に嘘をつく。

ある一つの考えがマグナスの頭を過る。確信に近い勘であった。

「それは素晴らしい。教育熱心な家庭教師を妹につけることができ
て私も嬉しく思う」

またもやエミリアは言葉を失った。てっきり何を馬鹿げたことを、
と言われるのを覚悟していたのだが。

しかし伯爵は少しも怒った様子はなく、先ほどにはなかった笑みすらその顔に浮かべているような気がした。

何かとてつもなく嫌な予感が背中を駆け上がり、エミリアは思わず
レティシアを抱きしめていた手に力を込めた。

マグナスは庭に出る為に作ってある石造りの階段をゆっくりと下り
た。

その姿はまるで一国の王子さながらのように優雅で、絵になる光景
であった。驚くべきことに伯爵はこちらに向かって歩いている。

そう気づいたエミリアは一步後ろに下がりがたくなったがレティシア
の手前、なんとか踏みとどまった。

ちょうどエミリアがいる場所まであと数歩、というところで突然テラスの扉が開き今日の為に新調したドレスを着たメリッサが現れた。

「マグナス！」

静寂が一気に破られ、近くの木に止まっていた鳥たちが一斉にばさばさと羽を羽ばたかせ暗闇に消える。

「一体どういふつもりなの？今夜はあなたの為のパーティなのに、主役がいらないだなんて……」

苛々とした口調でマグナスの姿をとらえたメリッサは、庭にエミリアとレティシアがいるのを見てさらに眉間に皺を寄せた。

大きく胸の開いた流行のモスリンのドレスはメリッサの魅力を最大限に引き出していた。同じような色を着ているのにも拘らず、エミリアとのドレスとは大違いである。

家庭教師であることに流行のドレスは必要ないが、ほんの少しだけ憧れを持っているのも事実だ。

メリッサはマグナス、エミリア、そしてレティシアと順に視線を辿らせていき、言葉では言い表せないような奇妙な表情をした。

レティシアとエミリアはとくに寝ているものだと思っていたし、マグナスに至ってはどうして庭に下りているのかすら分らない。しかしメリッサが理由を問うよりも早く、マグナスの口が開いた。

「義母上、結婚相手を決めました」

その場にいた誰もが言葉を発せずにただ呆然とマグナスを見た。あまりに突然であり、予想もできなかった言葉だ。

「それは…その、素晴らしいわ。ええ、とても」

長い沈黙の後、ようやくメリッサは口を開いたが大きく戸惑っているのがエミリアには分かっていてた。

伯爵がこんなに早く結婚相手を決めたことには驚きだが、はっきり言って何の関係もない。伯爵が新しい奥方を娶ったところでエミリアの生活が何か変わるわけではないのだ。

ただレティシアとこの場にいるのはとてもまずい気がしたので、さりげなくレティシアを急かして屋敷の中に戻ろうとした。

可哀想な花嫁の名前は明日にでも屋敷中を駆け巡るだろう。それから花束を作っても遅くない。

しかしエミリアは前に進めなかった。その手を誰かが強く引いたからだ。

「あの…伯爵様？何かご用でしょうか」

レティシアと一緒にあって花を摘んでいた所為でエミリアの手は土で汚れていた。

その手を伯爵がじっと見ているという事実、かつと頬が熱くなる。レディがこんな手をしていることにきつと呆れていらっしやるのだが、マグナスが取った行動は全くの逆であった。

マグナスは暫くエミリアの手を見ていたが、不意に胸元からハンカチを取り出し丁寧に彼女の手に付いた土を払い落した。

そして軽く指先を取るとあるうことがエミリアの手に口づけをしたのだ。

エミリアもメリッサも呆気にとられる中で、マグナスはエミリアと視線を合わせたまま芝生の上に片膝を立てた。

「伯爵様！」

「マグナス！」

ラザフォード伯爵ともあるう人物が一介の家庭教師に膝を折るなどという信じ難い光景に、エミリアとメリッサはほぼ同時に声を荒げた。

しかしそんな2人の声を無視して、マグナスは言葉を続ける。

——それこそ、思ってもみなかった言葉を。

「エミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になってください」

——エミリア・アンダーソン嬢。どうか私の妻になってください。

年頃の娘がそうなように、エミリアにも結婚に対する憧れはあった。どこかの貴公子が自分を見初めて、愛を囁いてくれるのを想像したこともある。

もつとも。両親が亡くなり、家庭教師という職に就いた時にはそんなのは夢物語に過ぎないと諦めてはいたが。

しかしまさにその夢物語が現実になってしまふことを、一体誰が想像したというのだろう。

昨夜あまりの出来事にエミリアはろくに睡眠もとることができなかった。寝ようと思いい目を瞑ると、伯爵の言葉が何度も何度も繰り返し頭の中に響くからだ。

あの時テラスにいたのはたったの4人。暫く口も聞けなかった女主人は、さすがに状況を飲みこむのは早かった。

傍にいたレティシアに今聞いたことは誰にも話すなど念を押し、未だ伯爵の婚約者候補たちが残っているホールへマグナスを連れて戻っていった。

もちろんエミリアに鋭い一瞥をくれることを彼女は忘れなかった。

エミリアは何一つ分らないままテラスに取り残され、一体いつどうやって自分が部屋に帰ったのかも曖昧であった。

メリッサは完全に誤解している。きっとエミリアが何らかの方法で伯爵を誘惑したに違いないと思っている。

だが、よくよく考えてほしいのはエミリアのように身寄りも持参金もない娘がどんなに誘惑したところで名家の伯爵様がそう簡単になびくのかということだ。

遊び程度ならともかく、伯爵は結婚相手を探している。エミリアを

妻にしても何の得にもならないことを、早々にメリッサは気付いてくれるだろうか。

そんな淡い期待は朝食の席で見事に打ち砕かれた。

メイドから今日は自室で朝食を摂るようにと言われて初めて、メリッサはどうしようもないほどエミリアに怒りを覚えているのだと知った。普段ならエミリアも一緒に誘いが来るのに。

朝食もそぞろに、エミリアはマグナスの部屋へと足を急がせた。早々に昨日の言葉を撤回してもらい、メリッサにも納得してもらわなくてはいけない。

幸い、婚約者を決めるパーティは今夜もある。その中からラザフォード卿に相応しい奥方を見つけて頂かなくては。

伯爵にしてみればほんの気まぐれだったはずだ。美しく着飾ったご夫人方を見た後で、みすばらしい服に身を包んだエミリアを見たのが新鮮に感じてしまっただけ。

それかものすごくお酒に酔っていたか。

兎にも角にも一晩を置いた伯爵は冗談だとは言え、エミリアに求婚したことを後悔していることだろう。

一言あれは嘘だと言ってくれば謝罪などいらぬ。気のいい女主人と気まぐれな女はなかったし、これが原因で家庭教師をクビになってしまう方がよっぽど問題だ。

伯爵の部屋の前に来ると丁度、執事のポールが出てくるところであった。ポールはエミリアを見て一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに軽く頭を下げ自分の仕事へと戻っていった。

今さらだが、伯爵の部屋に入るのは初めてのことだ。そもそも入る理由もないし、エミリアがまともにマグナスと言葉を交わしたのは昨晚が初めてなのだ。

それまではマグナスの姿を見て頭を下げることはあっても、一切マグナスから話しかけてくることはなかったし、さらに言ってしまう

ばエミリアの存在自体マグナスは関知していなかった。

——まったく貴族の考えはよく分からないけれど、人を巻き込まないで欲しい。

沸々と湧きあがる怒りを抑え、ドアをノックする。

「誰だ」

「伯爵様、エミリア・アンダーソンです。お話があるのですがよろしいでしょうか」

「…入れ」

静かにドアを開けると紅茶のいい香りが辺りを漂っていた。

伯爵は窓際の椅子に座り、一人でチェスを打っていた。戦略でも考えているのだろうか、白と黒の駒がチェス盤の上を交互に動く。

その近くの小さなテーブルの上にはティーセットが置かれ、カップからは温かそうに白い湯気が立ち上っていた。

「何か用だろうか」

エミリアの方は見ずに、マグナスはそう言った。ナイトを動かすか否かで迷っていたからだ。

「昨晚のことなですけど……」

言いにくそうに切り出され、ああ、とマグナスは興味なさげに返事を返す。きつと式の日取りやドレス、婚約指輪のことなどを聞かれるのだと思った。

実はとくに女性が喜ぶようなダイヤの指輪は用意していたし、ドレスに関してはマグナスは全くの無知である為に義母に任せることにしている。

——その義母は昨日のマグナスの言動が大層お気に召さなかったら

しく、今朝は一言も口を利いていないが。

だが今さらどうしようもない。マグナスはエミリアと結婚することに決めたのだし、彼女以上にダニエルの母親に相応しい女性が今夜のパーティに現れるとも思わなかった。

聞いたところによると、エミリアは両親を亡くしているらしい。持参金などマグナスには不要であるし、義母などこれ以上増えても煩わしいだけだ。いないに越したことはない。

結局ナイトを動かすことに決めた。

「分からないことがあつたら、なんでも義母上に聞くといい。式はなるべく早く執り行いたいが……」

「待ってください伯爵！私はあなたと結婚するとは言っていないません
！！」

半ば悲鳴のように言われた言葉に、マグナスは耳を疑った。

「なに？」

そこで初めてエミリアと視線が合う。襟の詰まったドレスは度重なる洗濯で色が褪せていたし、古めかしいレースに縁取られた袖は幾分エミリアには短いような気がした。

時間がなかったのか、ずっときつちり結わえてあつた髪は緩く後ろに流されマグナスはその長さを初めて目にすることとなった。

胸の前で固く握りしめられた両手に、蒼白になった顔。唇は微かに震え、何度か物言いたげに開いてはまた閉じた。

どうやら昨日の言葉は決して冗談ではなかったらしい。エミリアは崩れそうになる足を必死に奮い立たせる。冗談でないのなら更に問題だ。

エミリアは一度大きく息を吸い、自分自身を励ました。部屋を訪ねた時は目も合わせない伯爵の傲慢さに怒りを覚えたが、真っ直ぐ見つめられる居心地の悪さを思えば百万倍マシだった。

仕立てのいい服を厭味なく着こなしている姿はまさに理想の王子様のようだし、この国でも有名な整った顔立ちは確かにメイドや令嬢たちが騒ぐのに充分だろう。

その上、名門と名高い伯爵様だ。その彼に見つめられていると思うだけで恥ずかしくて仕方がない。

マグナスはエミリアの頬にさつと紅が走るのを見て、あまりの初心さに驚いた。マグナスの知る婦人たちは彼と目が合うが否やにっこりと笑うか、誘うような笑みを浮かべるかのどちらかであったからだ。

——いや、それは今問題ではない。マグナスは思った。問題なのは

「ミス・アンダーソン。聞き間違いでなければ、君は私と結婚する気がないと？」

エミリアははつとしたように顔を上げマグナスを見てから、戸惑ったように頷いた。

マグナスは呆れ果てていた。一体どういうつもりで私の求婚を断るというのだろう。私と結婚すれば欲しいだけのドレスや宝石を言うことができるし、社交界でもラザフォード伯爵夫人と言う名は充分に羨望を集める筈だ。

マグナスが求めているのはダニエルにとって母親という存在になってくれることだけ。しかもダニエルが寄宿学校に入るほんの数年間だ。その後は妻がどういう暮らしをしようと、マグナスは大目に見るつもりでいたのに。

それにこのさき家庭教師を続けても結婚できるとは限らない。そん

な中で私の申し出を断るとは、なんと浅はかな女なのだ！

そう怒鳴ってやりたかったが、紳士としてマグナスは口を噤んだ。

しかし、微妙な雰囲気を感じ取ったエミリアは恐る恐る切り出した。

「伯爵様、この度のその、申し出は大変光栄に思います。しかし私は家庭教師の身。今なら伯爵様が私に求婚したことは誰も知りません。ですから――」

かつん、とマグナスの手から離れたナイトの駒が固い盤に当たって音を立てる。

マグナスは内心怒り狂っていた。何に、ではなく全てにだ。金色の髪をした家庭教師が結婚を拒むことも、おどおどその理由を説明することにも。

そして、こんな状況下にあってもマグナスがダニエルの母を娶らねばならないという現実にも。

彼女は何一つ分かってはいない。マグナスだって出来れば二度と結婚はしたくないが、それでもしなくてはならないのだ。

代々続く名門の伯爵家として後継ぎを立派に育てることも義務の一つ。それを途絶えさせる気は更々ない。

「さて、ミス・アンダーソン」

穏やかに彼女の名前を呼んだつもりであったが、マグナスの声は予想以上に低かったらしい。エミリアの肩が小さく跳ねた。

「私の申し出を受けることで君に益はあっても損は生じないと思うが、一体何が不満なのか教えて頂けないだろうか」

エミリアは息を飲んだ。伯爵の口から紡がれた言葉がまるで信じられない。

傲慢にも程がある。彼は私に断る権利すら与えてはくれないのだ。それに神聖な結婚を損得で考える人を夫として見ることなど一生できないだろう。

「もし、それでも君が私と結婚するのが嫌ならば」

マグナスはエミリアの口が開く前に続けた。これは最後通告だ、と心の中で言いながら。

「一時間以内に荷物を纏めてこの屋敷から出て行きなさい」
「えっ……？」

随分冷めてしまった紅茶を飲み、マグナスはゆっくりと立ち上がった。メリッサがイギリス中から買い集めているという中国趣味の茶器は美しいがマグナスの趣味ではなかった。

重い雲の隙間からところどころ漏れる光のカーテンは、屋敷の外に広がる芝生を照らしている。

それでもエミリアが結婚を断るのであれば、もう引き留めないつもりであった。しかし同時に断れるわけがないこともマグナスは知っていた。

一度職を失えば、紹介状なしに新しい働き口を探すのは容易ではない。二度と貴族の家庭教師は出来ないだろうし、生活の保障はなくなってしまう。

そんな馬鹿な選択をする人間がどこにいるというのだろう。

少なくともエミリアはそこまで浅慮な考えの持ち主ではないはずだ。

「どうして……そこまでしてまで私を妻に望む理由はなんですか？」

先ほどの勢いはすっかり無くなり、エミリアの声は呟くように小さくなっていった。

結婚を拒んだら働き口を失う。だからと言って、エミリアを愛してもいない男の許へ嫁ぐことを簡単に決めることは出来ない。

そう、伯爵はエミリアのことなど少しも愛してなどいないのだ。ただ何らかの目的があつて、エミリアでなくてはならないだけで。

もう選択肢は残されていないに等しい。だったらせめて理由が欲しかった。

「一つ言えることは、私は君と結婚しても愛や恋を求めたりはしないということだ」

「それはどういう意味でしょう…？」

「私が欲しいのは息子の母親であつて、妻となつた女性と色恋をするつもりはないのだ」

氷のような瞳で、氷のような冷たい声でマグナスは言った。

後ろを振り返りエミリアが呆然としているのを見て、優越感に似た感情が湧きあがる。

もう彼女の答えは決まつたも同然だ。

「さて。答えを聞かせて頂けないだろうか…エミリア」

マグナスの言葉にエミリアは絶望的な気持ちを抱えながら頷いた。それしか残された道はなかったからだ。

「なんですって！」

予想していたとは言え、メリッサのあまりの驚きようにマグナスは眉を顰め、エミリアは身を縮めた。

あの脅迫とも取れる奇妙な求婚にエミリアが頷くが否や、マグナスは早速彼女を義母の部屋まで連れてきた。言うまでも無く、結婚の報告をする為に。

数人のメイドに囲まれて紅茶を飲んでいた女主人は、突然の来訪にあまり歓迎的ではなかった。

マグナスがドアから入ってくるときに見えた微かな笑みは、エミリアが続いた時にはすっかりなくなっていたからだ。

「マグナス……」

右手を額に当て、疲れたように首を振ったメリッサにもマグナスは動じる様子はない。真っ直ぐに義母を見つめ、次にどんな言葉が来るのか待ち構えているようにも見えた。

その重苦しい沈黙に耐えられなかったのはエミリアの方だった。息は詰まり、今すぐ部屋から飛び出していきたい衝動をぴんと伸びたマグナスの背中を見ることが何とか抑えようと努力するのに必死だった。

まだそんな冗談を言っているの？

聞こえる筈のないメリッサの心の声が、溜め息に重なり耳の奥で不協和音を奏でる。

メリッサの視線はマグナスを辿り、彼の背に隠れるようにして立つエミリアを見据える。その顔にははつきりとした嫌悪が見て取れた。

——やはり受けるのではなかった。エミリアはマグナスの後ろで気付かれないようにそっと、溜め息を吐く。

仕方がなかったとは言え、よくしてくれた女主人の信頼を失うのはあまりに辛いことだった。

しかし、例えエミリアがこの場所でマグナスに脅されたのだと訴えたところで、ますますエミリアへの不信感が増す以外は状況は何も変わらないだろう。結局のところどんなに関係を深めたところで、

エミリアは一文無しの家庭教師に過ぎないのだ。

貴族の言葉とエミリアのような中流階級者の言葉、人々がどちらを信じ支持するのは目に見えている。それを知っているエミリアはメリッサの視線を避け、口を噤むしかなかった。

「あなた一体自分が何を言っているか分かっているの？エミリアは家庭教師で、おまけに持参金すら持っていないのよ？」

口調は落ち着いていたが、メリッサの激しい感情ははこちらまで伝わってくる。侮辱ともとれる発言にもエミリアはじっと耐えた。

「ええ」

対するマグナスは義母の苛立った様子をものともせず、冷静にその怒りを受け止めていた。

マグナスにとって義母の都合などまったく気にするところでもない。歳を感じさせない美貌に現れる怒りは、ただただ煩わしいだけであつた。

貴族として最初の結婚で美しく身分のある女との結婚は果たした。だが今度ばかりは別だ。義母が求めているような娘と結婚する気は更々ない。

ちらりと後ろに控えているエミリアを見れば顔を真っ青にして、今

にも倒れそうであった。マグナスはさりげなくエミリアの腰を支えるようにして手を伸ばしたが、エミリアの腰は軽々とマグナスの腕が回ってしまうほど細く、その瞬間弾かれたようにマグナスを見る瞳は頼りなくどこか幼い。

そういえばエミリアはまだ18なのだということを思い出し、マグナスは自分の放った言葉に少しだけ後悔を覚えた。

もっと誠意を込めて事情を話せばよかったのだろうか。しかし、誠意や優しさの術を彼は知らなかった。

せめてエミリアには結婚後何一つ不自由はさせないつもりでいる。彼女はただダニエル之母親という役割を担ってくればそれでよかった。

マグナスが軽くエミリアを自分の方へ引き寄せたことに、メリッサはますます眉間に寄せた皺を深めた。

「マグナス！」

メリッサの金切り声には流石にマグナスも黙ってはいなかった。

確かに法律上ではメリッサはマグナスの母親かもしれない。しかし実際は血の繋がりのない赤の他人だ。

家督であった父が生きていた頃ならまだしも、伯爵の称号は既にマグナスのものであり、そのマグナスが全てを決定する権利を持っている事を義母は忘れている。

人間としての道理はわきまえているが、生憎マグナスには家族にすら分け与えるような優しさも慈悲も持ち合わせてはいなかった。

冷やかに義母を見下ろしたマグナスの視線は一瞬にして彼女を黙らせるのに十分な威力を持ち合わせていた。マグナスの横で腰に回された手にはばかり意識が向いているエミリアには分からなかったのが唯一の救いだ。

「義母上。私は口論をしにきたものではありません」

「え、ええ。そう…私もあなたと言い争いなどしたくはないわ」

先ほどまで興奮で頬を上気させていたのにも拘わらず、メリッサは指先から氷水の中に入れられたような冷たさを肌で感じていた。

気を紛らわそうとカップに手を伸ばしたが、指先が取っ手の部分に軽く当たっただけで断念せざるを得なかった。情けないほどに震えている。

「義母上が私の結婚に心を砕いてくださっていることにはとても感謝しています。しかし、私はもうミス・アンダーソンを妻にする決めたのです」

「でも」

「これ以上の話し合いは必要ない。式は一か月後。必要な経費はすべて私が出します。義母上はどうか彼女の力になってください」

尚も言い募ろうとするメリッサの声を片手で遮り、マグナスはそのままエミリアの手を引き彼女の部屋を後にした。

ドアが静かながらも重々しく閉まる音が後ろ手に聞こえ、くぐもった声でメリッサが何か叫んでいるのを掻き消した。マグナスは歩く速度を落とそうはしなかった。長い脚の一步は女性——それもあまり背の高くないエミリアにとっては数歩にも匹敵する。

空気が重く、息を吸うのですら緊張を強いられた。

一連の会話の中で言い訳どころか一言も言葉を発することが出来なかったエミリアは必死で遅しい後姿を追いながら、マグナスの言った”話し合い”は完全な失敗に終わったのだと悟った。

「私は明日、ここを発たなくてはならない。色々準備を進める為に」

唐突にそう切り出し立ち止ったマグナスの背中にエミリアはあと少

しでぶつかるころだった。後ろに体を引いてなんとかそれは避け
たが、マグナスの言葉の意味を咀嚼した途端耳を疑った。

——明日、発つですって？

確かめるように心の中で繰り返したエミリアは自分の耳がおかし
かった所為で聞き間違えたのではないと分かると、ますます混乱した。
一体伯爵は私をここに残してどうしろというのだろう。確かに婚
前の男女が一緒に住むことなどありえないだし、実家がないエミ
リアにとって勤めているチェザースハウスが実家のような場所だ
と思っただろう。

しかしそれは、エミリアが同じような身分の男性と結婚した場合だ。
まさか先ほどのメリッサの態度をもう忘れてしまったのだろうか。
冷たい態度を取られたまま一か月を過ごすだなんてとてもじゃない
が耐えられない。メリッサは決してエミリアを許したりはしないだ
ろう。

仲が良かった使用人たちの顔も次々と浮かんで消えていく。彼女
たちはメリッサほどではないが、きっとエミリアに対して前のよう
に気さくに話しかけてはくれないだろう。

余所余所しい視線、この屋敷の中でどこにも自分の居場所がない自
分——考えるだけで体が震えてくる。

そんな毎日をごすのなら、家畜たちと同じ場所で眠れと言われた
方がよっぽどましだった。少なくとも彼らはエミリアに冷やかな視
線を向けたりはしないのだから。

「式はこの館か私の領地で行う。そうだな、君は招待したい友人が
いるだろうからここがいいだろう。花嫁を新郎に引き渡す役は私の
方で探しておくとして、花嫁衣装は……」

「伯爵様」

未来の花嫁の方を振り返りもせず、自分の都合だけを押しつけてく
るマグナスの言葉を途中で遮り、エミリアは静かに頭を下げた。

心身ともに疲れ切っていた。たった半日の間に自分の残りの人生はまるで地獄へと変わり果てた。

マグナスの息子の母親になる、それだけの為にエミリアは全てを失った。愛してもいない、愛されてもいない男に神の御前で結婚の誓いなど立てられるはずもない。

涙すら出てこないのは未だに現実を受け入れられないのか、それとももはや希望すらも絶たれたと諦めたからなのか。

いずれにしてもこれ以上マグナスと顔を合わせていることはエミリアには出来なかった。

「今日はもう休ませて頂いてもよろしいでしょうか？式に関しては全て伯爵が言う通りにいたします」

これがあなたの望んでいる答えなのでしょう？エミリアは言葉にそういう意味を込めて言った。

マグナスの表情は俯いていた所為で見えなかったが、拳に力が入ったのは分かった。怒らせてしまったかもしれないがそんなことは気にならない。

どう行ってもこれ以上悪い方向へ進むことなどないのだから。

「よろしい。また何かあればこちらにくるとしよう。ではゆっくりと休みなさい、エミリア」

皮肉をたつぷりと含んだキスをエミリアの白く柔らかな頬に落とすと、マグナスは紳士の礼を取った。それに続きエミリアもドレスの裾を持ち応える。

お互い背中を向け合い別々の方を向いた時、マグナスは苛立たしげに齒軋りし、エミリアは一筋の涙を流したのだった。

＊

「ちょっと、そのあなた」

流行のドレスを着た女性に引き留められ、エミリアはその場で立ち止り頭を下げた。今回のパーティに招待された客全ての顔など覚えてはいないが、ぞんざいに自分を呼んだところからしてきつと名のある貴族なのだと分かる。

グランヴェル卿が家庭教師に求婚したと言う噂は誰を通してかは知らないが、既に屋敷中に広まっていた。

気位の高い女主人やましてや伯爵になど真相を聞く者はいない。そうなると必然的に人々の怒りや好奇の矛先はエミリアに向かう。

エミリアが疲れ切った精神を休める為に部屋へ向かう間に、来客からは鋭く睨まれメイドたちからはなにか言いたげな視線を何度も向けられた。

一つ一つに反応する気力も残ってはいなかったが、貴族の呼びとめを無視するわけにもいかない。なるべく彼女たちが知り得ない通路を通ってきたがそれも限界だったようだ。

「あなたがこの家の家庭教師？」

「…左様でございます」

自分が呼びとめられる理由はそれしかないのだが、次に浴びせられるであろう言葉を思うとどうしても体が硬くなってしまう。

「そう。どんな手を使ったのかは存じませんが、素晴らしい手腕をお持ちなのでしょうね。是非ともご教示願いたいわ」

分かつてはいたが他人に言われると言葉は威力を増すものだ。エミリアに出来ることはただ黙ってこの場をやり過ごし、令嬢たちの嫌味が終わるのを待つだけ。

どうやったって一介の家庭教師が伯爵を誘惑したのだと皆思ふのだ。自分が当事者ではなかったらエミリアでもそう思っていただろう。

メリッサが招待した客に美しさだけではなく、教養も兼ね備えた令嬢が殆どいなくて良かったと心底感謝した。

知識のある人間はそれだけ語彙も豊富だ。今のように何度も同じ言葉と言われ続けられ少しずつ慣れてくるが、頭のいい令嬢に言われた一言はこれの何万倍もの威力を持ってエミリアの心臓を刺した。涙が出ぬように頭の中で必死にかけ算を数えたが、それでも一瞬だけ耳に入った言葉は令嬢の声のトーンまでも鮮明に思いだすことが出来るほど。あの痛みは二度と味わいたくはない。

エミリアが小さく震えていることに満足したらしい令嬢は、さつとドレスを翻らせ靴音を響かせながら廊下の奥へと消えていった。

漸く深く息を吸うことが許され、エミリアは肺いっぱい新鮮な空気を取り入れた。季節は変わるというのに、どこか湿った空気は渴いた喉をゆつくりと潤していく。

鼻の奥が微かに痛んで、やっと自分が泣くのを堪えているのだと知った。子供の頃はよく大声で泣いては両親を困らせ、おもいっきり甘えた。母親の腕の中と、父親の髪を撫でる手が何よりも優しいのだと分かっていたから。

だけどその両親はもういない。誰もエミリアが泣くのを傍にいて慰めてくれる人はいないのだ。

——泣くのはまだ早いわ。そう自分に言い聞かせエミリアは部屋へと足を進めた。

部屋に帰ったらず鍵を閉めて、熱いお茶を飲もう。それから楽しいことを沢山考えるのだ。伯爵との結婚は悪いことばかりではないかもしれない。

きっと伯爵はロンドンや領地の事で頭がいっぱいで私のことなど気に掛けないに違いない。伯爵の息子とうんと仲良くなって私自身の手で立派に育てよう。幸い子供は大好きだし、男の子を相手にするのは初めての経験だ。きっと毎日が発見と驚きの連続だろう。

ふとレティシアの事を思い、エミリアの心は今までにないほど決めた。

自分の尊敬する兄が私のような身分を持たない女と結婚することを、彼女は一体どう思うだろう。私のことを恨むだろうか。

昨夜2人で作った花束をレティシアは嬉しそうに眺めていた。それがこんなことになるなんて誰が想像できたと言っただろう。

レティシアの恨みの籠った悲しい瞳が頭の中に浮かんでは消え、その度にエミリアの心は激しく痛んでいった。

マグナスが宣言した”一か月後の式”は、思ったよりも早くやってきた。気付けば結婚式は明後日に迫っている。

初めの一週間こそは満足に睡眠もとれないほどであったが、日を重ねるだけエミリアの心にも僅かながら余裕が生まれていた。

状況はエミリアが覚悟していたほど悪くはなかったのが一番の理由だろう。

メイドたちはエミリアが考えていたよりずっと寛大で、二言三言冗談交じりに嫌味を言われた以外はいつも通りに接してくれている。仲の良かったリーザはマグナスが領地に帰った翌日、エミリアの顔を見るなり大声で歓声を上げ抱きついてきた。

彼女は「あなたなら何かやってくれると思っていたのよ！素敵だわ！」とまるで自分のことのように喜んで、エミリアの為にハンカチを何枚か縫ってくれたし、メイド頭のアンナは一昨日の夜さりげなくレースで編んだ結婚式用の手袋を渡してくれた。

なによりエミリアを安心させたのはこの家の主人2人のことだ。メリッサは相変わらずエミリアに腹を立てているが、それでも前ほどではなく、つい先日朝食と一緒に取らないかと言われた時は泣きそうな程嬉しかった。

レティシアが大人たちのように貴族の世界にまだ疎かったのは幸いした。彼女は尊敬する兄と大好きな家庭教師の結婚に大喜びで、花嫁のブーケを作る役目は自分に任せてくれと言って大人たちを困らせた。結局兄の一言でそれは叶わなかったが、エミリアはこっそり一本だけならブーケの中に紛れさせることが出来るとレティシアに耳打ちしたことで彼女の機嫌を損ねることはなかった。

明日の結婚式が終わり次第、エミリアはラザフォード領へと旅立っていく。

少ない荷物をトランクに詰めていたエミリアは、おおよそ結婚を控えた女性には似つかわしくない溜め息をついた。

ベッドの傍には明日着る予定の花嫁衣装が、白く輝きながらそこにあった。古ぼけた時代遅れのドレスしか持っていないと知っていたメリッサが特別に用意させたのだ。

仮にもラザフォード伯爵夫人になるという娘に粗末な格好をさせるわけにはいかなかったのだらう。

メリッサがエミリアの為に呼んでくれた洒落た服に身を包んだ仕立屋は、エミリアの体をあちこち寸法しては時々意見を聞いたり何か考えるような仕草をしていた。

とは言ってもエミリアにはドレスにあれこれ注文をつけられるほどのセンスも無かった。ドレスを作ること自体久しぶりであるし、貴族が追いかけている流行にはとても疎かったのだ。

結局、デザインの殆どが仕立屋の意見で成り立ったのだが、憤ましかでそして美しかった。仕立屋もラザフォード伯爵夫人のウエディングドレスを作ったとなれば更に自分の知名度が上がる事を見越してか、出来上がったドレスは神前で誓いを立てるにはぴったりの出来栄えであった。

結婚式にきた人々は誰もエミリアが身寄りのない孤児だとは思わなだらう。

だけど一体それに何の意味があるというの？ふいにそう思い、ぴたりと忙しなく動いていた両手が止まる。

傍から見たら幸せに満ちた未来を描けていただらう。しかしエミリアの心の中は結婚式が近づくにつれ、深く重くなっていた。

先ず偽りの愛を神の前で誓うことに罪悪感を覚えた。神の教えを重んじていた両親に育てられたエミリアにとって、最も神聖だと言われている結婚に嘘をつくことは鉄の塊を飲みこむように苦しいことであった。

貞淑を誓い、従順であることは出来る。しかし生涯の愛を誓うほどにはマグナスを知らない。エミリアが知っていることと言えばたっ

た二つ。伯爵は噂通りに彫刻のように美しく、氷のように冷たい心を持った人物ということだけだ。

「ミス・アンダーソン」

控え目なノック音の後、執事のポールがドアの隙間から顔を出した。ポールの白髪混じりのグレーの髪は緩やかに後ろに撫でつけられており、いつそうポールの人柄の良さを際立たせているようだった。彼は一礼してエミリアの部屋に入ると、目を細めて感慨深げに部屋中を見渡した。何か言いたげな表情でエミリアを見たポールだったがそれは一瞬の事で、次の瞬間には直ぐにいつもの執事の顔に戻っていた。

「旦那様がお見えます」

その言葉にエミリアの心臓は一気に早鐘を打つ。

伯爵と顔を合わせるのはあの日以来実に一カ月ぶりのことだ。つまり準備があるからと婚約したその日に領地に帰ってから、マグナスがエミリアを訪問したのは初めてのことなのだ。

こんな些細なところにも愛情がない結婚だということを知らしめているようでエミリアはとても悲しかった。

「そう……」

知らず知らずのうちに声も緊張を孕んで硬くなっていく。

「分かりました。伯爵様はどちらに？」

「応接間にいらっしゃいます」

「すぐに参りますと伝えてください」

ポールが部屋から出て行った後、エミリアは鏡に映る自分に溜め息をつきたくなった。結婚間近なのだからと言われ、もう随分レティシアの勉強を教えてはいない。彼女には来週新しい家庭教師がつけられるらしい。

仕方がないことだとは言え、自分の居場所が一つ消えていくことが切なく感じる。いつもの習慣できつちりと髪を結ってはいるが、それもなんとなく板につかなくなってきていた。

数秒鏡を見つめたエミリアは短く息を吐くと結っていた髪を解いた。腰まで伸びた金色の髪はきつく編み込んでいた所為で緩くウェーブを描いていた。

半分だけ結び、あとの半分は背中に流す。

「大丈夫よ、エミリア。きっと大丈夫」

いつものように鏡の中の自分に言い聞かせ、エミリアは覚悟を決めたようにゆっくりと脛を上げた。

ドレスがみすばらしいのはいつものこと。今更どうすることも出来ないし、これがエミリア・アンダーソンなのだ。

*

応接間には香りの高い紅茶が温かそうな湯気を出していた。つい先ほど執事のポールがこの紅茶と一緒にエミリアが来ることを伝えていた。

マグナスは紅茶に口をつけようとはせず、天井まで伸びている窓の傍に立っていた。

あれからひと月が経ったが、毎日目が回るほどの忙しさであった。帰ってすぐに結婚の告知をし、新たに迎え入れる妻の為に彼女付きのメイドを何人が雇った。マグナスが結婚すると言うと屋敷中の使用人たちは一瞬絶句したが、伊達に優秀な者ばかりを集めた訳ではない。

すぐに気持ちを切り替えた彼らはそれから一週間も忙しく働く羽目になったのだった。

しかしマグナスの仕事はそれで終わりではなかった。執事のネルソンは控え目に、だが的確なアドバイスとしてマグナスにあの部屋を改装してはどうかと提案した。

あの部屋とは言うまでも無く、代々奥方のみが使われる事を許される部屋——つまり、伯爵夫人の部屋だ。

つい数年前までは亡き妻、サリアナが使っていたのだが、彼女が亡くなってからは手入れこそきちんと行き届いてはいるものの人が住む温かさはない。それにサリアナの華美な趣味はエミリアのイメージにはどうも合いそうにもなかった。

しかし改築の許可を出したまでは良かったものの、使用人たちはあれこれ煩わし程にマグナスを質問責めにした。

奥様は白と生成色のどちらがお好きでしょうか？奥様の新しいドレスは何着お揃えになりますか？奥様の髪の色は？瞳の色は？

幼い頃からマグナスを知っている乳母は特に遠慮がなかったが、マグナスはなんとかその場をやり過ごすことが精一杯であった。何しろ彼は何一つエミリアの事を知らないのだ。

いや、経験から言えば女というものは美しいものに惹かれる。サリアナがそうであったように、また社交界で出会う女性がそうである

ように。

高価な宝石とドレスの新調に必要な分の金を出せば、天性のセンスで彼女たちはそれらを身につける。

だが——マグナスはエミリアのことをゆっくりと思い出した。襟の詰まった地味な色のドレス。一つの宝石もつけてはいないが、真珠のように白い肌。きつく結われてはいたが、金色の髪は美しいと称賛するに値する。

彼女にはダイヤモンドよりも、もっと控え目な宝石が似合うだろう。そう思ったマグナスはもう何年も踏み入れていなかったサリアナの部屋へと足を進めていた。

母が亡くなった後、母の形見の宝石が詰まった箱はサリアナが管理していたはずだ。彼女は大きな粒の宝石しか見に付けてなかったが、確かあの宝石箱には真珠のネックレスとイヤリングがあった。

おぼろげながら、幼い時に何度か母がそれらをつけているのが記憶に残っている。それをつけるのは特別な日で、決まって母は機嫌が良かった。

彼が歩いた日、初めて言葉を喋った日、一人で字を書けたとき。母にとってそれらすべてが特別だったのだ。

——無意味な回想だ。マグナスは目当ての宝石を取り出すと別の箱に入れ、すぐにポケットにしまった。彼にとって過去は思い出ではなく、くだらない人生の一瞬にしか過ぎないのだ。

その直後、執事が扉をノックした為マグナスは気持ちを切り替えることが出来た。ネルソンは静かに客人の来訪を告げ、マグナスはそのまま旧知の友人とロンドンへ旅立ち結婚式を一週間前に控えるまでカードゲームと一夜の恋に没頭した。

例えどれ一つとして彼を満足させてくれるものはないと知っ

て一週間ぶりに領地へ帰ってきたマグナスはすぐにエミリア

と結婚する為にベッドフォードシャーへと出発した。

出発のほんの数時間前には久しぶりに息子との対面を果たした。金色の髪こそサリアナそっくりなダニエルだが、それ以外のパーツは間違いなくグランヴェルの血を引いている。

光を失ったような瞳はまるで自分自身の子供の頃を見ているようであまり気持ちのいいものではない。父を前にしても笑顔一つ零さず立っているだけの幼い子供に、マグナスは同じように無表情で「あまり面倒なことは起こすな」と言っただけで父と息子の短い時間は終わった。

ダニエルは一言も喋ってはいなかった。

マグナスは珍しくからりと晴れた空を見上げ、大きく息を吐いた。エミリアを妻に迎えたことで、少しでもダニエルが落ち着けばいいが。

「——伯爵様？」

不意に声を掛けられ、マグナスは急いで声のした方に視線を走らせた。

見ればエミリアが訝しげな表情でこちらを見ているではないか。ノックもせずに入ってきたのだろうかと不快に思ったが、エミリアの次の言葉でそれは間違いだったのだと気づいた。

「あの、何度もノックはしたのですがお返事がなかったもので……申し訳ございません」

「いや。どうやらぼんやりしていたようだ」

マグナスの返答に緊張を抜いたエミリアの髪は肩をさらさらと流れる金の系のようだった。柔らかく光を反射しており、微かに花の香

りがしたような気がする。
その髪に指を絡めて衝動に駆られ、マグナスは慌てて視線を逸らした。

「明日の結婚式のことだが、内輪だけで行くことにした」

マグナスにそう切り出され、エミリアは驚いて顔を上げた。この国でも有名な伯爵だ。きつと参列者も多いのだらうと憂鬱に思っていたのだが、内輪だけならばまだ耐えられるかもしれない。明らかにほっとした表情の彼女の目の前に、マグナスは持ってきていた箱を差し出した。

「母の物だ。明日の結婚式に付けるといい。きつと——」

きつと君に似合うだらう。その言葉は無意識に呑み込んでいた。

「まあ…とても綺麗」

初めて見る本物の真珠の美しさに、エミリアは溜め息をついた。一生手にすることはないと思っていた宝石の一つだ。

繊細な装飾が施された箱に収まったネックレスとイヤリングは、淡く光を放ちながら明日の結婚式を心待ちにしているように見える。

エミリアの心は激しく揺れていた。

はたしてこんな中途半端な気持ちで、結婚などしてもいいのかと。覚悟は決めた筈なのに、それもマグナスを見た一瞬で崩れかかっている。

「君が私の息子にとって良き母になることを願っている」

だがそんな心の揺らぎも、マグナスの一言でぴたりと止まった。

良き母——やはり伯爵は私のことなどちつとも愛していないんだわ。そしてこれからも愛するはずはないと確信している。それは幸せな結婚を夢見ていた年若いエミリアにとって、あまりに残酷な現実だった。いつか少しでも心を通わせることが出来たのなら、と淡い期待は見事に打ち砕かれたのだ。

「…精一杯努力します。伯爵様」

笑えるような気分ではなかったが、出来る限り笑顔に見えるようにしてエミリアは応接間を後にした。

静かにドアが閉まるのを見ていたマグナスは、不快感を滲ませながら眉を顰めた。あんな下手くそな造り笑いを見たのは生まれて初めてだ。子供でももう少しまともに出来るだろう。

マグナスはエミリアの泣きそうな笑顔を思い出した。

それはとても不快で、出来れば二度と見たくはないような悲しい笑顔だった。

教会内の肅々とした雰囲気は高い天井いっぱい響くパイプオルガンの音で破られた。

雰囲気に圧され知らず知らずのうちに息を詰めていたエミリアは、深く息を吸おうとしたがあまり上手くいなかった。

——遂にこの日が来てしまったのだ。

祭壇へと続く深紅の絨毯の先には数段の階段があり、マグナスがエミリアの方をじっと見つめている。両側の席にはマグナスが招待した客と、メリッサやレティシア、それに馴染みの使用人たちの顔があった。

緊張でブーケを持つ手に力がこもってしまったが、招待客は全員祭壇の方を向いていたので誰にもそのことを知られる心配はなかった。彼らの目にはエミリアは世界で一番幸せな花嫁に映っていることだろう。家庭教師をしていた孤児が一夜にして名門の伯爵夫人になる。こんなことは長い英国の歴史を振り返ってもそうそうない。張本人であるエミリアでさえ、こうして花嫁衣装に身を包んだ今でも小説の中へ飛び込んだような気がしてならなかった。

内輪だけの式だからよかったものの、マグナスの友人たちを呼んでいたらエミリアに向けられる視線はもつと冷たかったはずだ。人々が降って湧いたようなロマンスを持て囃すのは一時のことで、その後は嫉妬と侮蔑に塗り替えられていくと決まっている。

一歩、また一歩とマグナスの元へ進める足は鉛のように重たい。

花嫁を新郎に引き渡す役目を買って出てくれたミスター・コリンズは、ひげをたくわえた口元を始終嬉しそうに緩ませていた。

自分には娘がいなかったから今回のことはとても嬉しいと笑っていた彼に、エミリアは今は亡き父を思った。恰幅のいいミスター・コリンズとは違って父は細身ではあったが、同じように朗らかに笑う

人だった。

そうして彼の手を取った時は幸せを感じることが出来たが、いざ教会に入ってみるとその幸せは一瞬で吹き飛んでいった。

マグナスはすつと背を伸ばしてエミリアを待っていた。だがそれは愛しい人との結婚を今か今かと待ちわびている姿ではない。

一刻も早く結婚式を終わらせて、馬車を飛ばしラザフォードへ帰る強い意志を持った姿だ。

オルガン奏者の演奏は完璧で、エミリアが祭壇に到着したと同時に緩やかに流れていた音楽は僅かな余韻を残してゆつくりと止まった。マグナスは花嫁が自分の目の前に着くと同時に目で前を向くよう指示しただけで、エミリアの手すら取るうとはしなかった。

悲しくなっている場合ではない。今日は幸せな花嫁を演じきるのよ。薄いベールで仕切られた視界は思った以上に沢山のことを隠してくれた。

エミリアの顔に過る様々な感情——緊張や悲しみ、それから絶望はベール一枚でないも同然となる。

「汝、マグナス・グランヴェルはエミリア・アンダーソンを妻とし……」

牧師のゆったりとした口調は心地よかったが、エミリアの緊張はますます高まるばかりだった。隣で夫となる伯爵が誓いの言葉を述べれば、次はエミリアの番だ。

誓います。ただ一言それだけを言えばいい。

だけどそのたった数文字の単語の羅列に、エミリアはどうしようもなく怯えていた。

「誓います」

マグナスの低く、響く声が誓いの言葉を口にする。

牧師が軽く頷きエミリアの方に慈愛に満ちた顔を向けた。

「汝、エミリア・アンダーソンはマグナス・グランヴェルを夫として……」

「誓います」

間を開けずに言ってしまった所為か、牧師の表情が少し歪んだ。エミリアは気まずさにおもわず俯き、自分の失敗について深く反省した。

「この誓いをもって2人を夫婦とします」

気を取り直すように先ほどよりも幾分張った声で牧師は言い、それに続いてマグナスの手が軽くエミリアの手を持ち手袋を脱がせた。彼の手にはダイヤモンドが輝く指輪があり、これが嵌められて誓いの口付けをすれば2人は神の元に定められた夫婦となる。マグナスが2つの指で指輪を持ち、エミリアの薬指に近づくのを彼女はぼんやりと見つめていた。

嵌めた指輪はとても冷たく、ダイヤモンドはずっしりと重かった。やがてマグナスが視界を覆っていたベールをゆっくりと上げ、エミリアは今日初めて夫となる人物をじっくりと見る事ができた。いつもよりも丁寧に撫でつけられた黒髪はひと房だけ額に落ちていて、グレーの瞳は同じようにじっと、エミリアを見つめていた。

マグナスは妻となる人物の薄茶色の瞳が僅かに揺れるのを見逃さなかった。涙こそ零れてはいなかったものの、少しでも気を緩めれば途端に彼女は泣きだしてしまうだろうという確信があった。

これが彼女にとっても幸せな結婚ではないことは十二分に分かっている。だが今更どうしろというのだろうか。

彼が贈った真珠のネックレスとイヤリングは思った以上にエミリア

に似合っていたし、純白のドレスはほっそりとした体を包んでいて、正直に言うところと眩しいほどであった。

しかし当の花嫁は——本来なら幸せいっぱいの顔をしていてもおかしくない花嫁は、きつく口を結んで何かに耐えるかのように俯いている。

少しぐらいまともな演技は出来ないのか。マグナスは心の中で毒づいた。少なくとも彼自身は完璧に花婿を演じているつもりであった。教会に入ってから一度もマグナスの顔を見ないことも大きな不満であった。いつそのこと華奢な体を引き寄せて大声で自分を見ると叫んでやりたい衝動を押さえながら、嫌味なほどゆったりとした口調の牧師の後に続く。

自分の番が終わり花嫁も同じように誓いの言葉を繰り返し、用意していた指輪を彼女の指に指輪を嵌め、誓いの口付けをする。一度経験したことはしっかりと頭の中に刻みつけられていた。

また同じことを繰り返し返せばいい。しかしマグナスは前妻との結婚式ではしなかった行動に出してしまった。

エミリアの、自分より一回りも小さな手を軽く包んだのだ。自分自身の行動に驚きながらも彼は花嫁に触れる程度のキスをした。

——死が2人を別つまで。

エミリアは目を閉じて先ほどの誓いの言葉を思い出した。死が訪れるその瞬間まで、私は辛い結婚生活に耐えなくてはいけないのだわ。

一瞬だけ触れた体温はすぐに冷たくなっていた。

＊

「ここから私の邸までは2日はかかるだろう」

揺れる馬車の中で隣に座った伯爵は幾分か声を張り上げてそう言った。

結婚式が終わるや否や今日は泊って明日の朝出発すればいいと言うメリッサの言葉を振り切り、マグナスとエミリアは4馬だての立派な馬車へ乗りこんだ。

仲が良かった使用人やレティシアへの別れの挨拶もそこそこに出てきたエミリアは、後ろの馬車に少ない荷物を詰め込んでマグナスの隣に座り、失礼だとは思いつつも周りに目を走らせていた。

生まれて初めてこんな立派な馬車に乗ったのだが、何時間も座っている所為かお尻は少しずつ痛くなってくるし、無言の道中は決して快適とはいえない難かった。

マグナスはこういった旅には慣れているのか、それともただ単にエミリアと何も話すことがないのか、馬車に乗ってから口を開いたのは今の一度だけであった。

「2日も？」

エミリアの問いにマグナスは頷く。

「ああ。もう少し走ったら街に着く。そうしたらそこで宿を取ろう」

軽く馬車が揺れた。エミリアは天井から垂れさがっている吊革にしっかりと手首を絡ませ、マグナスに頷いた。

馬車の技術が数世紀前と比べて格段に良くなったことと、英国の道路が世界一舗装されていることからそれ程の揺れは感じなかったが、なにぶん馬車で移動することが殆どなかったエミリアは少しの振動にもいちいち敏感にならざるを得なかった。

ベッドフォードシャーを出たのは夕方近かった為、外は既に暗く目を凝らしても窓の向こうは果てのない闇であった。月すらも見えない所為かエミリアは不安げに体を震わせる。

結婚式の間は何とか持った天気だったが、あと数時間もすれば重く張り巡らされた雲からは雨が無数に落ちてくるだろう。御者もそれが分かっているのか、主人たちに快適な旅をさせるよりは出来る限りスピードを出して宿に着く方を優先したらしい。

エミリアは不安だった。これから先、一体何が起こるのか全く予想がつかない。

今まで旅と言ったらベッドフォードシャーの屋敷までの短いものであったし、どこかに泊って別の土地へ行くということがなかった。宿というものの定義もよく分かっていたはいなかった。

大きさはどれくらいあるのだろう。旅人たちと同じ部屋で眠るのかしら。それとも別々の部屋になっているの？食べ物はあるものがあるのだろうか。エミリアの疑問は尽きなかった。

そしてメリッサが出発前に言った不可解な言葉の意味——確か怖がらずに、全て旦那様に任せなさいと言っていた——もエミリアを落ち着かない気持ちにさせたことの一つであった。

実際のところ、エミリアが夫婦というものについて持っている知識は驚くほど少なかった。本来教えられるべき母も既におらず、メリッサのくれた言葉だけが彼女がすべきことを示していた。

全てを任せればいい。学校に行っているとき、同じクラスの少しま

せた女の子たちがときどきそういった話に花を咲かせていたのは知っていた。エミリアは恥ずかしさが先立って話には交ざらなかったが、アネットという子がそんなことを言っていたような気もする。結局のところ妻は夫の所有物同然なのだから従っていれば間違いはないだろう。

窓ガラスに指を這わせると外気との気温差でそこはしっとりと濡れていて、指の跡には僅かな水滴が流れる。恐る恐る隣へと視線を向ければ、伯爵は先ほどのエミリアと同じように窓の外に広がる暗闇を見ていた。

「なにか私の顔に付いているのか？」

ふいにそう言われ、エミリアは慌てて言葉を探した。伯爵の瞳はただ自分には向けられていないのに、どうして私が見ていると分かったのだろう。

「いえ、その、ご子息のことを少し伺いたいと思ひまして」

咄嗟に出た言葉ではあったが、マグナスとの結婚が決まってからエミリアがずっと聞いてみたかったことだ。伯爵の一人息子のことは誰も教えてはくれなかった。

メイドたちの噂に上るのはいつも伯爵のことばかりだったし、誰かに聞くことも憚れた。

マグナスが結婚することを決めたのはその息子に母親を持たせたいからだ。自分がその役目を担うのなら、伯爵本人から聞きたいとも思った。

「息子のこと？」

「ええ。なんでも構いません。教えてください」

エミリアの方を向いたマグナスは不機嫌そうであつたが、しゅしゅという感じで口を開いた。

「名はダニエルといい、今年で3つになる。髪の色は君と同じ金髪で、瞳は……グレーに近いブルーだ」

瞳のところで一瞬言葉に詰まつた彼であつたが、伯爵は息子のことをそう表現した。しかしエミリアが聞きたいのはそんなことでなかった。

外見などは一目見たらすぐに分かる。大切なことは彼が何に興味を持って、何が好きで、どんなことに喜びを感じるのかだ。

マグナスとの結婚はきつと冷めたものになるだろうとエミリアは知っていた。愛のない結婚の結末はいつだって寂しくて悲しいものだ。しかしエミリアの結婚生活にはダニエルという特別な存在がある。

子供は大好きだし、男の子と女の子の違いこそあれどレディシアと過ごしてきた中で子供への接し方はある程度心得ているつもりだった。

出来るだけ早くダニエルと仲良くし、親子の絆を深めたい。最初はダニエルもエミリアを母として受け入れることに抵抗があるだろう。子供というのは環境の変化にとても過敏だからだ。

だからこそ彼のことをよく知っておきたかった。

しかし、エミリアの期待とは裏腹に伯爵はそれっきり口を閉じてしまった。

「あの、伯爵様？」

「私は君の夫になった。マグナスと呼びなさい」

「はい。ではマグナス……ダニエルのことについてもっと知りたいのです。彼はどんなものが好きなのでしょう」

こちらを向いたマグナスの表情は何とも言えない奇妙なものだった。

マグナスはまじまじとエミリアを見ると吐き捨てるように「今私が言ったことが全部だ」と答えた。

「え？」

「だから全部だと言った。ダニエルが何を好きかなど私の知るころではない。屋敷に着いたら乳母にでも聞くといい」

再びマグナスが窓の外に視線を向け、本格的に会話は終了となった。自分の息子のことも満足に知らない父親がいることにエミリアは愕然とした。彼は…息子のことを愛していないの？

広い屋敷の中で使用人たちに囲まれ、ぽつんと一人で立ち尽くすダニエルの姿が目に見えかぶようだ。まだ3つなのに、心を許す人物もいなければどんなに心細いであろう。

エミリアは椅子の背もたれに背中をつけて溜め息をついた。

外は雨がぱらつき始めていた。

08（前書き）

R15程度の描写がございます。

本格的に雨が降り始めてしまったので、伯爵一行は街に入るとすぐに宿を探した。街は日が暮れたのにも拘わらず旅人や仕事を終えた職人たちで溢れかえっていた為、宿が取れるか不安はあったが幸いなことに今夜の寢床はすぐに見つかった。

慌てて宿から飛び出してきた主人に一番上等な部屋を2つ用意するようにと言ったマグナスは、エミリアが雨に濡れないように外套で体を覆ってくれていた。お陰でエミリアは髪が少し湿ったぐらいで済んだのだった。

宿は決して新しくはなかったが清潔に保たれており、入ってすぐのところにある暖炉のほのかなあたたかさが冷えて切っていた体にはありがたかった。

マグナスがどう思っているかは知らないが、少なくともエミリアは黒ずんだ太い柱や黄ばんだレースのカーテンについてはまったく気にならなかったし、2階へと続く階段が歩く度に不気味な音を立てて軋むのはとてもわくわくした。

「こんな田舎に伯爵様のような立派な方がお見えになるなんて、ほんとにまあ、思ってもみませんでした」

宿屋のおかみさんはそう言って豪快に笑った。赤毛にそばかすの散った顔はエミリアの女学校時代の友人を思い出させる。彼女もまたこんな笑い方をする子だった。

テーブルの上には簡素ながらきちんとしたディナーが並んでおり、グラスにはワインが注がれていた。よく煮込まれた子羊のシチューのいい香りが、素直に空腹を促す。

「大したおもてなしは出来ませんが、ごゆっくりどうぞ。あ、

伯爵様、もつとワインをお持ちいたしましょうか？」

おかみさんの問いにマグナスは軽く右手を振っただけであった。呼ぶまで下がれ、という意味だ。

伯爵の態度にエミリアは眉をひそめたが、おかみさんはちつとも気にしていない様子でもう一度「ごゆつくり」と言って部屋から出て行った。

途端に室内は静まり返る。時折風に煽られた雨が窓を叩く音だけが、その静寂を破っていた。

おかみさんがいなくなったことでエミリアは急に落ち着かなくなってきた。室内は蝋燭の灯りだけが唯一の頼りだが、その炎に照らされたマグナスの顔すらまともに見ることが出来ない。

伯爵はもくもくと食事を続けているし、自分から何か話しかけるのも無作法な気もしてきた。仕方なく口を噤んでいることに決め、エミリアはそつとスープを口に運んだ。

雨足は更に強まっていく。一人ではないとは言え、こうして音のない部屋にいと子供の頃のように怖くなってくる。

いつの間にかスプーンを持つ手が止まり、エミリアはじつと窓の外を見た。闇夜に混じってぼんやりと他の宿の灯りがちらついていた。

「もう食事はいいのか？」

不意に声を掛けられて、おもわず持っていたナイフと食器がぶつかってしまった。それほど大きな音ではなかったものの、エミリアは慌ててナイフとフォークを降ろした。

さっきまであんなにお腹が空いていたと言うのに、これ以上は食べる気がしなくなっていた。

エミリアは曖昧に頷きながら目の前のグラスを取った。初めて飲んだワインは一瞬だけ体に熱を持たせ、ゆつくりと喉を下っていった。

「美味しい」

「ワインを飲むのは初めてか？」

「ええ、実は」

もう一度グラスに口をつけると、さきほどよりも口当たりがなめらかなような気がした。

マグナスはじつとエミリアを観察していた。それなりの食事で腹を満たし、赤ワインで喉を潤し、旅のスタートにしては過酷な一日が終わろうとしている。

馬で長旅をする自分とは違って、殆ど家から出なかったエミリアには堪えただろう。明日はもう少しゆっくりと道中を行こうとマグナスは心に決めた。

初めて飲むと言うワインを口にしたエミリアの頬はうつすらと紅色に染まっていた。少女の清らかさを残しつつ、今にも花開きそうな蕾を思い出しマグナスはぐっと奥歯を噛んだ。

室内の薄明りに浮かぶような白い肌、雨に濡れて髪が張り付いた頂、不安げに窓の外を見る瞳、それら全てがとても——とても忌々しかった。女性に対しては人並み以上の経験と理性を持っていると自負している自分が、10も年下の少女に僅かでも欲望を感じていることが腹立たしかった。

焦ることはない。マグナスもワインに口をつけながら心の中で呟いた。

マグナスはこの胸の奥を焦がすような欲求が一時的なものだと思っていた。結婚を完全なものにしようと焦る心が急かしているだけで、一度ベッドを共にしてしまえばたちまち情欲の炎は消えるはずだ。焦ることはないのだ。経験のない彼女には夫として優しく導いてやらなくてはならない。せめて初夜ぐらいは。

「エミリア」

まだ半分も残ったワインをそれ以上飲む気にもなれず、マグナスはグラスをそつと置いた。

中央で赤々と燃える蝋燭の炎は、マグナスの吐息で僅かに揺れる。

「今日は疲れただろう。先に化粧室を使って着替えてきなさい」

初めてとも言えるマグナスからの労いの言葉に、エミリアの胸はかっと熱くなった。出会ってから今まで、こんなに穏やかな声で話すマグナスは見たことがなかったからだ。

しかし…先にとは一体どういうことだろうか？マグナスも後からこの部屋の化粧室を使って着替えるのだろうか。確か部屋は2つ用意しており、伯爵の部屋はとなりの筈だ。

だがなんとなく、確かめるのも変な気がしてエミリアは静かに立ち上がった。きっと言葉のあやだろう。

恥ずかしげに頷いて化粧室へと消えていく妻を見送って、マグナスはとても満足していた。自分の目は正しかったのだと今更ながらに思わずにはいられなかった。

マグナスの知る限り、エミリアのように初々しい反応を示した女性は初めてであった。尤も、彼が相手にする女性は大抵人妻か未亡人だったのだが。

貴族社会に生きていれば自然と性についての知識は豊富になる。ご婦人がたは男たちのいないところで堂々とそういう話をするところがあるし、中には幼い子供がいても平気で家に愛人を連れ込む親もいるだろう。

マグナスの両親もそういう人種だった。マグナスは何度両親の若い浮気相手を目にしたか分らない。

そんな中で暮していれば、演技ではない初心な反応を見ることは稀だ。彼女は演技の才能がないと知っているから、あれは間違いなく

自然な反応だと確信できた。

エミリアがこの先もその初心さを失わなければいい。浮気などされ
ては後々面倒なことになりかねない。

そうやって破滅の道を行つた貴族を、マグナスは何人も知っ
ている。何度も目にしてきた。彼らと同じ道を歩む気は更々なかつ
た。

「伯爵様？」

化粧室のドアが開いて、エミリアが出てきた。シンプルな白いナイ
トドレスはよく見るとレースの刺繍が施されており、胸元のリボン
を引いた時のことを想像し、マグナスは口の中が渴いた。

このまま着替えるのもなんだかもどかしく感じてくる。いいや、そ
れはあまりにも不作法ではないのか。

マグナスは戸惑つたように自分を見上げる妻を見た。髪を結ってい
ない彼女は薄暗い明りも手伝って、いつそう華奢で儚げに見えた。

彼女はこれから起こることを何一つ知らないのだと思うと、このま
まベッドに誘うのはあまりに酷な気がした。だが、彼女はもう私の
妻だ。妻は夫の所有物となる。

マグナスに見つめられていることに気付いたエミリアは所在なさげ
に身じろぎした。グレーの瞳に服の中まで見透かされているような
気がして、とても恥ずかしくなったのだ。

視線を逸らしても彼が自分をじつくりと観察していることは痛いほ
どに分かった。

「エミリア」

伯爵の声はひどく掠れていたが、低音は少し離れたエミリアのこ
ろにも届いた。彼が自分を呼んでいるのだと気付いたエミリアは、
ゆつくりと伯爵の元へ足を進める。

化粧室を出てマグナスがさつきと寸分も変わらず同じ位置にいることにも驚いたが、すぐ傍まで来たエミリアの腰をおもむるに引き寄せたときには小さく悲鳴を上げてしまった。

「は、伯爵様!？」

「マグナスだ」

椅子に座ったままと言うのに、マグナスの視線は立ったままのエミリアとそう変わらない。グレーの瞳は冷たい印象しか受けなかったが、ゆらゆらと揺れる蠟燭の炎が映り、まるで氷の中で燃える炎のようだった。

マグナスの手がエミリアの髪の中に入り、指先が耳の形をなぞる。冷えた指にエミリアの肩が軽く跳ねた。

「嫌か？」

そう聞かれた時にはマグナスの指は唇に触れていた。吐息が肌に触れるほど近い位置にいることに気付くと、エミリアは固く目を閉じる。

マグナスは答えを待たなかった。次の瞬間にはゆっくりと唇が重なり、先ほど飲んだまろやかなワインの味がエミリアから考えることを奪っていった。

誓いの口付けとは全く違う。これが夫婦のキスなんだろうか。僅かに唇が離れた時、ぼんやりとする思考の片隅でそんなことを思った。軽く額にキスをされ、エミリアは恥ずかしさに顔を赤らめた。

マグナスはそんな妻を軽々と抱き上げるとベッドへと運んで行った。安物の狭いそれは2人分の体重で軋む音がした。

真っ白なシーツの上に金の髪が散らばり、ナイトドレスはエミリアの呼吸に合わせて胸元のリボンが上下した。先ほどの口付けで彼女の息は乱れていて、それがどうしようもなくマグナスの理性を掻き

乱した。

もう一度濡れた唇にキスをし、胸元のリボンを解こうとマグナスは手を伸ばした。

「マ、マグナス？」

繰り返されるキスに軽い眩暈を覚えていたエミリアはリボンを解こうとするマグナスを見て、漸く事態が掴めてきた。信じたくないが彼は私の服を脱がそうとしている。

エミリアの上ずった声にもマグナスは止まらなかった。勢いよくリボンを解き、白い首筋に噛みつくようにキスをした。

「やっ…止めてください！」

初めての感覚にエミリアは恐怖を感じていた。気付いた時には押しつぶされそうなほど近くにあったマグナスの逞しい胸板を両手で押し返していた。

「なんだ」

不機嫌そうに問うマグナスはそれでもまだ、エミリアから体を離そうとはしなかった。彼は自分の下敷きになっている小柄な妻が、今どんな気持ちでいるかも分かっていない。どうして止めたんだと言わんばかりだ。

「私たちは夫婦になった。君が私を拒む理由などないはずだ」

マグナスの言葉は至極当然のことだった。しかし、不安に駆られていたエミリアにはとても冷静に受け止められるようなものではなかった。

知識としては乏しいものの、メリッサとアネットが言っていたことがこのことなのだということは分かった。

——怖がらずに全てを旦那様に任せればいいですって？何をどう任せろというのだろう。マグナスの瞳には初めての妻を労わる様子も、優しさの欠片もないというのに。

それもそうだろう。マグナスは、ラザフォード伯爵は私と結婚しても愛や恋を求めるつもりはないと言った。そんな人にどうして全てを任せることができる。

ただ人形のようにじっとして、その時が過ぎるのを待つことはエミリアには出来そうにもなかった。

「嫌です」

小さく、しかしはつきりとエミリアは拒絶の言葉を口にした。

「嫌だと？なぜだ」

「それは……」

「はっ、いいか、マダム。私たちは結婚した。これは夫婦として当たり前のことだというのはお分かりいただけないだろうか」

マグナスの声には嘲りが含まれていた。彼はまさか自分の妻に行為を拒否されるとは思っていなかったのだろう。

怒りなのか、悲しみなのか果たしてその両方なのか、エミリアの目には次々と涙が溢れていた。愛のない結婚なのは分かっているが、愛のない行為はしなくなかった。

マグナスは暫く鳴き続けるエミリアを呆然と見ていた。半分肌蹴た胸元は隠そうとはせず、エミリアは両手で顔を覆っていた。まるで全身で彼を拒否しているかのように。

漸く冷静になった頭で、改めて自分がしたことを目の当たりにしたマグナスはひどく後悔した。だが同時になぜ拒否されなくてはいけ

ないのかという怒りも覚え、そんな自身を激しく罵った。

鳴き続ける妻の髪を一撫でし、マグナスはベッドから離れた。そうしないともう一度彼女を組み敷いてしまいそうだった。今度は理性が本能を押し留めるかどうか分からない。

例えばこのまま彼女を自分のものにしてしまっても咎める者は誰もいないだろう。寧ろ夫を拒んだ妻の方が奇妙な目で見られる。

だが――なぜだかは、マグナスにも分からなかったが――それはしたくなかった。半ば無理矢理な結婚ではあったが、彼女の気持ちを無視してまで体を手に入れたとは思わなかった。

マグナスは椅子に掛けてあった自分の上着を取ると、なんにも言わずに静かに部屋から出て行った。

後にはエミリアのすすり泣く声だけが頼りなさげに響くだけであった。

「あれが私の屋敷だ」

マグナスの言葉と共に今まで白樺の並木道が急に途切れ、屋敷が姿を現した。一年前も同じことを思ったが、やはり大きな屋敷だった。屋敷の前には道を挟んで湖があり、悠々とそびえるグランヴェル邸が湖面に映り風とともに揺れていた。

数えきれないほどの窓、庭師の手入れが行きとどいた庭、一年前はじつくりと見る余裕もなかったのだが改めてラザフォード伯爵の財力には驚かずには居られなかった。

——あの宿の一件から、マグナスの口数は極端に減っていた。元々多弁な方ではないが、無表情に押し黙っている伯爵と馬車で旅を続けるのはとても気まずかった。

勢いに任せて夫婦の契りを拒否してしまったエミリアは一通り泣き終わった後ひどく後悔した。本来ならあってはならないことだ。

一夜明けて朝食を共にした時にはいつ離婚を言い渡されるか冷や冷やしていたが、驚いたことにマグナスは夜のことについては何も触れなかった。

伯爵はそれ程気にしていないのだろうかと思ったエミリアだったが、すぐにそれは間違いだと気付く。前よりもずっと、紳士的ではあったが余所余所しい態度を取り続け、2人きりになると必ず無口になってしまうのだ。

食事の時も自分の分を食べ終わるとすぐにマグナスは宛てられた部屋へと戻っていく。エミリアもそんなマグナスに話しかける勇氣は持てず、結果としてひたすら窓の外を見ている旅になってしまった。本当なら聞きたいことはたくさんあったのに。エミリアは泣きたくなるのを必死に堪えるように下唇を強く噛んだ。

貴族の暮らしについては、知識としてある程度しか持っていない。果たしてエミリアは社交界に出なくてはいけないのか、それとも邸でずっとダニエルと過ごしていればいいのか分からない。エミリアとしては後者の方がありがたかったが。

「素敵なお屋敷ですね」

マグナスは頷き、「お褒めに与り光栄だ。マダム」と答えた。しかし、やはりその顔は無表情のままであった。

もう一度屋敷に視線を向けたエミリアはマグナスに気付かれないように小さく溜め息を吐いた。

実際のところ、確かにグランヴェル邸は立派だったがエミリアの理想とする”家”ではなかった。そこにあるのは冷たい石造りの箱としてそこに在るだけのようにも思えた。

例えばエミリアの実家のように、外へ出ていても必ず帰ってきたいとは思えない。ただ漠然とした寂しさが、屋敷から温もりを失くしていた。

馬車が屋敷の前で止まると、まるで見計らっていたかのように屋敷から何人もの使用人たちが出てきた。一列に並んだ彼らは主人と奥方が馬車から出るまで人形のように動かないのには驚いた。

「彼の名前はネルソン。この邸の執事だ」

マグナスに紹介された男は礼儀正しくお辞儀をした。その後ろの家政婦たちも同じように彼に続く。

「お待ちしておりました、奥様。長旅でお疲れでございましょう。こちらにお茶をご用意しております」

——奥様。ネルソンの言葉にエミリアはおもわず身を固くした。

まだ伯爵夫人と呼ばれるようなことは何一つしていない。エミリアには教養こそあれど、伯爵家をバックアップするような家名もマグナスを受け入れる準備も出来ていないのに。

エミリアは目の前にそびえ立つグランヴェル邸を見上げた。今日から我が家になる屋敷を。

そう、足を竦ませている場合ではない。今日からエミリアが女主人としてこの家の采配を取らなくてはいけないのだから。

マグナスは既に用があると言ったので、エミリアは先に屋敷の中に入る事となった。

ネルソンの後に続き、屋敷に入ったエミリアはその広さと豪華さに息を飲まずには居られなかった。

玄関から真つ直ぐ続く階段への廊下は歩く度にコツコツと音が鳴り、2人分の足音を天井へと響かせる。その天井には大きな絵が描かれており、いつか本で見た有名な画家の天使と神の絵にそっくりであった。

廊下の端にはずらりと彫刻や陶器が並び、細長い窓から零れる光が優しくそれらを照らしていた。

エミリアは少々気後れしながら、それらを見ていた。彼女の目に入る物全てが近寄りがたかった。

「こちらでございます」

ネルソンに案内されたのは深紅の壁紙が印象的な部屋だった。金縁の額の大きな絵が飾られており、その下の暖炉からは赤々とした炎が燃えていた。

部屋は適度に温かく、エミリアは来ていた上着を脱いでネルソンに渡した。ぐるりと部屋を見渡すと、こまごまと色々なものが飾られていることが分かった。

あの大きな絵の近くには2、3枚小さな絵があつたし、大理石の暖炉の上には真鍮製の時計が正確な時を刻んでいた。

壁と同じ色のソファの背もたれはビロードの生地を使っており、室内をより一層洗練されたものになっている。濃い茶色のテーブルも、照明に照らされて鈍い光を放っていた。

周りを見渡せば見渡すほど、自分が全く別の世界に来てしまっているようにしか思えなかった。エミリアは出された紅茶にもろくに手をつけることが出来なかった。

暫くしてネルソンが一人の女性を連れて部屋へ入ってきた。メイド頭だったアンナよりも幾分年上のように見える彼女は、にこにここと愛想よく笑いながらエミリアに深く礼をした。

「こちらで長年勤めております、ミセス・タリスでございます」ネルソンが代わりに女性の紹介をした。

「はじめまして、奥様。旦那様より屋敷をご案内するように仰せつかっております」

柔らかい声だった。ミセス・タリスの言葉を聞いてエミリアはグラウンヴェル邸に来て初めて、肩の力を抜くことが出来た。

伯爵家の人間は使用人に至るまで何もかもが完璧すぎる。チェザース・ハウスにいた時のような陽気な気配はなく、皆一様に口を結んで仕事に勤しんでいた。

それが一流の使用人なのだと言われればそれまでだが、その重苦しい空気には慣れそうにはない。エミリアが元家庭教師だということは、使用人みんなが知っているだろう。皆が皆、エミリアがラザフォード伯爵夫人になったことを喜んでくれているとは限らない。

だがミセス・タリスの微笑みは母親のような温かさを持っていて、そんなエミリアの不安を吹き飛ばしてくれるようだった。

エミリアもおもわず彼女に微笑み返した。

「ありがとう、ミセス・タリス」

「まあ、こんな素敵な奥様にお仕え出来て私も嬉しゅうございます」

満面の笑みでそう言ったミセス・タリスを見て、この女性なら屋敷での不安を和らげてくれるだろうとエミリアは確信した。彼女ならきっと、エミリアの力になってくれる。

会ったばかりの家政婦だが、エミリアは既に心からの信頼を寄せていた。

「こちらが西の間でございます、中国趣味調の部屋になっております。メリッサ様がお作りになったものですが、客室として使用することも稀でございます」

初めに案内された部屋はとても奇妙な感じがした。テーブルや椅子など基本的な家具は英国式なのだが、そこに描かれているのは全くの別世界であった。

そでの長い服に、後ろだけを残した髪、油絵とはまた違った画法は確かにメリッサが集めていた茶器で見たことがある。落ち着いた色が多いこの邸では珍しい色の組み合わせに、エミリアはくすくすと笑った。

「あちらが彫刻の間、その反対側は絵画の間でございます。奥は黄色の間、茶色の間と続きます。茶色の間には歴代の伯爵家の肖像画が飾っております」

「随分沢山あって…全ての部屋を覚えるのには何年もかかりそうだわ」

エミリアの言葉にミセス・タリスは大きく頷いて同調した。

彫刻の間、絵画の間は細長く広い部屋が希少価値の高い芸術品で埋まっていた。歴代の伯爵が時間をかけて集めたものなのだろう、その美しさにはエミリアも暫く言葉を失った。

伯爵家には趣味を超えた芸術品が数多くある。どれもこれも保存状態は極めて良く、作られた当時のような美しさを保っていた。

——マグナスは芸術に精通している方なのかしら。どちらかと言ったら乗馬などの方が得意そうだが。しかし、貴族の嗜みとしてある程度は学んでいるのだろうと、エミリアは納得した。

黄色の間は、その名の通り視界が黄色で染まってしまうような部屋だった。壁から椅子の背もたれにいたるまで黄色で、天井は辛うじて薄い緑と白が使われていた。

しかしよく見るとそれぞれに繊細な模様が描かれており、その他の家具は落ち着いた白で統一されていた。

歴代の伯爵家の肖像画が並ぶという茶色の間は、残念ながら好きになれそうにはなかった。金の額に縁取られた肖像画は皆一様にじつとこちらを見ており、その威圧感といったら、もう息が詰まってしまいそうだった。

その為、エミリアはさっと目を走らせた程度ですぐに部屋を後にしてしまったのだった。

ミセス・タリスに連れられて緩くカーブした階段を上ると、ずらりといくつもの部屋が連なっていた。マグナスの部屋と、書斎の場所を軽く説明したミセス・タリスは、ある部屋の前で止まるとエミリアにドアを開けるように言った。

訝しげに思いながらもドアを開けたエミリアは、目に飛び込んできた光景におもわず息を飲んだ。

その部屋は白と薄いグリーンで統一された落ち着いた部屋だった。今まで見てきた部屋は豪華だったが温かみを感じられなかったのだが、この部屋だけは違っていた。

大きな窓にかかるレースのカーテン、壁に掛けられた金縁の鏡、清潔そうなベッド。エミリアは一目でこの部屋が好きになった。

「お気に召しましたか？」

まるで悪戯が成功した子供のような目をしてミセス・タリスはエミリアに聞いた。

「とても素敵なお部屋だわ」

「奥様のお部屋でございますよ。レディ・グランヴェル」

「私の？」

「ええ。奥様の為に旦那様が部屋を改装なさいました」

エミリアは更に驚いた。

マグナスの部屋のすぐ近くのこの部屋は、歴代のレディ・グランヴェルが使用した部屋に間違いないのだろう。マグナスの母、そして亡くなった前妻の部屋でもあった筈だ。

その2人の思い出が詰まっている部屋をエミリアの為に改装してしまったのだろうか。なんとなく申し訳なさで胸がいつぱいになる。

エミリアはもう一度部屋を見渡した。明るい部屋、趣味のいい家具はエミリアの好みにぴったりだ。

「素敵な部屋だわ…本当に」

後でマグナスにお礼を言おう。そして、一昨日の無礼について謝ろう。エミリアはそう心に決めた。

＊

まだ自室を見た興奮は冷めなかったが、まだまだ知らなくてはいけないことは沢山ある。名残惜しげに部屋を後にしたエミリアは、ふと思ったことを口にした。

「あちらのお部屋はどなたの？」

2つ向かい側の部屋を指すと、ミセス・タリスは「ダニエル様のお部屋でございます」と答えた。

「ではその隣は？」

一瞬、ミセス・タリスは言葉に詰まった。

「あれは――」

「君には関係のない部屋だ」

ミセス・タリスの言葉を覆うように冷たい声が響いた。そこには丁度階段を上ってきたばかりのマグナスがいた。

彼は既に着替えたのか、さっきとは違う恰好をしていた。

「それより自分の部屋は気に入ったか？」

「え、ええ…本当に素晴らしいお部屋でした。ありがとうございます」

「よろしい。図書館に行く前に庭を案内してもらいなさい。きっと君も気に入るだろう」

それだけ言うとマグナスはさっさと書斎へと入っていった。

暫く呆然としていたミセス・タリスとエミリアだったが、ドアが閉まる音で現実へと引き戻された。慌てて庭を案内しようとするミセス・タリスの後に続いて、肝心なことをエミリアは失念していた。

あの部屋が一体誰のものなのか、そしてどうして伯爵はエミリアにそれを隠そうとするのか。

だが伯爵家の庭の素晴らしさに目を奪われていたエミリアにはそんなことを考えている余裕はなかった。きっと何か良くない思い出でもあるのだろうと、軽く考えていた。

その部屋の秘密と、マグナスがその胸に抱えている秘密が繋がっていることを知らずに――

マグナスは肘掛椅子に体重を掛けると、天井を仰いだ。先ほどの態度は些か不自然すぎやしかったかと。

適当にはぐらかせばよかったのに、逆にエミリアに不信感を持たせたのではなかったかと思うと気が気ではなかった。

嘘や秘密の類は隠そうとすればするほど綻びが出るものだ。適度に本音を晒した方が却って上手く隠れる。

しかしそうなるとマグナス自身、ここ数年目を逸らし続けてきたものと対面せざるを得ない。そうなるには今しばらく時間がかかりそうだった。

目を閉じれば簡単に過去へと戻ることが出来る。

マグナスの子供時代は決して楽しいものでも愉快なものでもなかったが、全てを否定しなくてはならない程悲惨でもなかった。

ただ、自分は愛されるべき存在ではなかったただけだ。笑うのは苦手だったし、大人たちの間で育ったマグナスには子供らしい愛嬌はなかった。

そんな子供を誰が好き好んで愛してくれるというのだろう。大人になった今ならこう言える。私ならお断りだと。

苦々しげに溜め息を吐き、マグナスは溜まった手紙を一つ一つ開けようとナイフを取った。然るべき伯爵夫人として、エミリアにはなるべく早く社交界に出てもらおうと思っていた。

幸か不幸か、目の前には貴族からの招待状が山ほどある。その中からそれほど敷居が高いものではないものを選ぶつもりであった。

何しろ社交界というのはある意味悪の巣窟のようなところだからだ。女は真偽が不明の噂話を好み、優劣をつけるのが大好きだ。自分より美しいドレスを身につけている者、爵位が高い者には絶えず媚を売るが、劣っていると判断した人間には驚くほど冷たい。

長年貴族として生活してきたマグナスは上手く立ちまわることが出来るがエミリアはそうではないだろう。

ふと、彼女が貴婦人たちに囲まれて怯えた表情をするのが目に浮かび、おもわず持っていたナイフに力が入ってしまいマグナスの指を僅かばかり傷つけた。

エミリアは間違いなく社交界で注目の的となっているだろう。自惚れている訳ではないが、マグナスは自分が他人の目からどのように映るかをよく知っていた。その奥方で、それも元家庭教師となれば必然的に人々の口上に上るわけだ。決して、いい噂ではないことだけは確かだが。

余計な波風を立てられて、面倒なことになるのはなんとしても避けたかった。

ずっとマグナスが傍についてやることも叶わない為、慎重に招待状を選ばなくてはいけなかった。新しいドレスを作る必要もあるだろう、彼女が持っていた野暮ったいものでは駄目だ。優雅で最新のドレスを作らなくては。

マグナスは一通の招待状を手にとった。招待主は古くからの知り合いで、父の友人でもあった侯爵だ。

夫婦共に穏やかな性格ではあるが、人を見る目は確かだ。この2人に認められたのなら、社交界で敵は作らないだろうとも言われている。

これはまたとない好機だ。

マグナスは早速ネルソンを呼ぶと、この招待を受けることを告げた。

目の前に広がる光景に、エミリアはただただ言葉を失くしていた。屋敷から庭に続く階段を数段降りると、開けた場所があり、中央の噴水を中心に色とりどりの花が美しさを競っている。

更に下に降りると綺麗に刈られた小ぶりの木を囲うように何十もの小さな花壇があった。ところどころに彫刻もあり、その周りにも小ぶりな花が咲いていて、よりいっそう彫刻の精巧さを際立たせていた。伯爵家の庭はとても有名だったが、これほどまでとは思わなかった。

深く息を吸うと、ひんやりとした空気が肺いっぱいに入りとても気持ちがいい。聞こえるものと言えば森に住む鳥の声、噴水から流れる水の音だけだ。

少し離れた場所には東屋があり、その向こうにはひっそりと木の影に隠れるようにして小さな館があった。

エミリアはチェザースハウスにいた頃、庭に同じようなものがあったのを思い出した。屋敷とまではいかないものの人が住むには十分な大きさを持っていたため、庭を觀賞する為だけに作られたものだと聞いた時にはとても残念に思った。

屋敷のように豪華ではないが木とレンガを使った素朴で温かみがある館に、エミリアはとても興味をそそられた。隣にいたミセス・タリスもそれに気付いたのかさりげなく館の方へとエミリアを誘導してくれた。

その一画だけは人工的に作られた庭ではなく、まるで森の中にいるかのように自然に草木が生えていた。

館の周りを彩る花々もエミリアがよく知る植物ばかりだ。高さがバラバラの草木に、時々小さな鳥が止まり辺りをきょろきょろと見回す。エミリアたちの足音が聞けるとすぐに羽をはばたかせて逃げてしまったが、すぐにまた別の鳥が舞い降りては可愛らしいくちば

しで餌を探していた。

館に近づけば近づくほど、エミリアはその魅力に惹かれていった。外壁を伝うようにして蔦が覆っていたが、それですらその館を飾る一つの風景のようにも思えた。

「中には入れないの？」

エミリアがそう聞くと、ミセス・タリスは残念そうに首を振った。

「申し訳ございません。館の鍵は旦那様がお持ちで、掃除以外の理由で出入りすることはできません」

「そうなの……」

何か隠しているような気もしたがそれ以上を聞くことは憚れた。使用人には主人の秘密を広めたがる者と、なんとしてでも守ろうとするものがある。経験から言って、ミセス・タリスは後者だ。

エミリアも決して嗜好きというわけでもなかったし、他人の秘密を一々暴こうなどとは思わない。エミリアはそれっきり口を噤んだ。それにしてもやはり素敵な館だ。館の中を見られないのは残念だが、せめて窓から少しでも中を覗けはしないかと近づいたその時だった。近くの茂みがガサガサと揺れたかと思うと、金色の髪をした子供がちよこんと顔を出したのだ。

「まあ！ダニエル様！」

ミセス・タリスの悲鳴のような声で、この子がマグナスの息子だということが分かった。

金色の巻き毛に、グレーに近い薄い青の瞳。ふっくらとした子供らしい頬は走っていたのか紅色に染まっていた。だが、ダニエルと目

があつた瞬間、エミリアは言葉を失わずには居られなかった。

まるで本物のガラス玉のように、その目には何の感情も映つてはいなかったからだ。こんな目をする子供をエミリアは初めて見た。そして同時にとても悲しくなった。

レティシアのようにきらきらした輝きも、始めて会うエミリアに対する興味も、戸惑いも。目の前にいるから見ていただけ、彼女はそんな印象を受けた。

「今はお部屋にいる時間でございましょう。旦那様に見つかったら叱られますよ」

ミセス・タリスの言葉にダニエルは俯いたままで何も言わなかった。ただ、彼が洋服の裾をぎゅと握りしめたことで何かを耐えている事だけは分かった。

「ダニエル様、こちらは新しくレディ・グランヴェルになられたエミリア様でございます。ダニエル様の新しいお母様になりました」

ミセス・タリスがエミリアを紹介し、ダニエルに挨拶をと言うと、ダニエルは礼儀正しく膝を折ってエミリアに挨拶をした。

子供とは思えない完璧な挨拶の仕方に、エミリアは胸が痛くなった。咄嗟に抱きしめようと手を伸ばしたが、ダニエルが身を固くしたので慌てて手を引いた。

突然知らない大人から手を伸ばされれば、誰だって怯える筈だ。そう思い、エミリアはダニエルと目線を合わせるように屈んだ。ドレスの裾が汚れてしまうとミセス・タリスは慌てたがエミリアは気にしなかった。

ダニエルの瞳を覗きこむと、父親よりも色素の薄い目にしっかりとエミリアが映った。

「ダニエ——」

エミリアがダニエルの名を呼ぼうとした時、茂みから何かが飛び出してきた。どうやら子犬のコリーで、元気に吠えては一心不乱に小さな尻尾を振り、嬉しそうにダニエルの周りをぐるぐると回っている。

人見知りはない犬で、見知らぬエミリアにも近寄ってドレスに黒い足跡を残した。

「ダニエル様……」

ダニエルの肩が僅かに跳ねる。しっかりと子犬を腕に抱き、不安そうな目でミセス・タリスを見た。

ミセス・タリスは眉尻を下げてダニエルの腕の中から抜けだそうともがいている子犬の頭を撫でた。

「子犬は牧師様にお譲りすると約束したではありませんか」

ダニエルは子犬を抱えたまま首を振った。「嫌だ」小さいが、しっかりとした声でそう言う。

「ここで飼ってはいけないの？」

事の成り行きを見守っていたエミリアだったが、しっかりと子犬を抱いているダニエルを可哀想に思いミセス・タリスに問う。

「元々は屋敷で飼っていたものだったのですが、旦那様のお召しものを汚してしまって」

「まあ」

「旦那様は撃ち殺してしまえと仰ったのですが、あまりにも不憫だ

ったので、こつそり牧師様に預かってもらおうと思っていたのです」

何も知らない子犬だけが、ダニエルの腕の中でくうんと鳴き、尻尾を振っていた。

仕える家の為にならない動物は時として殺されてしまうことをエミリアは知ってはいたが、実際にそういう場面に出くわしたことはなかった。子供はそうやって分別を覚え、逞しく育っていくのだとメリッサは言っていたがどうしてもその考えに賛同は出来なかった。

ダニエルはとも子犬を可愛がっているように見えるし、そもそも何も知らない子犬には何の罪も無いのだ。ただほんの少し服が汚れたぐらいで殺してしまえだなんて、あんまりだ。

エミリアは子犬の頭を撫でた。子犬は嬉しそうにエミリアの掌を舐める。

「この子犬、私が貰っても構わないかしら」

弾かれたようにダニエルとミセス・タリスがエミリアを見た。

*

恐ろしく長いテーブルの上に次々と豪華な食事が並べられていく。

ナイフやフォークは顔が映るほどぴかぴかに磨かれ、食器一つをとっても素晴らしいものであった。

黙々と昼食の給仕をする使用人たちに、一々「ありがとう」と言うのに疲れたエミリアは大人しく食事をすることに専念した。どうやら使用人に感謝の言葉は不要らしい。エミリアが笑顔でそう告げる度に驚いたような奇妙な顔をされて初めて気づいた。

チーザースハウスでは当たり前だったことが、ここでは逆に不躰になるらしい。斜め前に座ったマグナスの視線を受けて、エミリアは恥ずかしくて死んでしまいそうだった。

「屋敷の中は全て見たのか？」

久しぶりにマグナスの声を聞いたような気がして、エミリアの心臓は軽く跳ねた。マグナスの声は低く、耳から心臓まで響く。

「ええ。とても広くて迷ってしまいそうです」

「そうならないようにこれから毎日、屋敷をあるく練習をした方がいいな」

マグナスの冗談にもエミリアはちゃんと笑えた気がしなかった。向かい側にはダニエルが座っている。彼もまた一言も喋らず食事を続けていた。

父息子の対面は驚くほど呆気なかった。マグナスは冷めた目でダニエルを一瞥しただけで、他には何も言わなかった。

エミリアとダニエルと一緒に食堂に入ったことにさえも興味を示さず、無言で席に着いた後はネルソンに二言三言伝言を告げただけであった。

こんな冷たい親子の再会があつていいわけがない。エミリアは心の中で憤慨した。しかし、ここで余計なことを口走ってマグナスの機嫌を損ねてしまう訳にはいかない。彼女には大事な使命があるのだ

から。

エミリアは静かに食器を置くと、マグナスの方をちらりと見た。別段機嫌がよさそうにも見えないが、おそらくこれが彼のいつも通りの顔なのだろう。

「あの…はく、いえ、マグナス」

おずおずと切り出した言葉はひどく不格好に聞こえた。声も掠れて、小さかった為マグナスには聞こえなかったかもしれない。

「なにかな？奥様」

奥様、という響きにエミリアの背中がぞくりとした。マグナスの瞳は何故か嬉しそうに輝いている。

「お願いがあるのですが」

「お願い？何か欲しいものがあるのか」

「ええ」

言い辛そうに切り出したエミリアを見て、マグナスの眉は僅かに上がった。

欲しいもの！苦々しげに心の中で繰り返す。結局エミリアもマグナスの知る婦人たちと何一つ変わらない。結婚した途端何かを強請る。だがダニエルの母となってくれるのなら、それくらいの代償は必要だとも思っていた。現にエミリアとダニエルと一緒に食堂に現れた時には表情には出さなかったものの、とても驚いたのだ。

マグナスは出来るだけ優しい顔を作ってエミリアを見た。彼女の目は左右に忙しく泳ぎ、とても緊張しているようだ。

「新しいドレスか？それとも宝石？何でも言いなさい」

「何でもいいのですか？」

「ああ」

エミリアの顔が一気に嬉しそうに綻ぶ。「本当ですね？」とマグナスに念を押すことも忘れなかった。

まさかとんでもなく高価なものを要求してくるのではあるまいな、とマグナスが訝しんだのも束の間でエミリアは弾んだ声でこう言った。

「犬が欲しいんです」

これには流石のマグナスも絶句せずには居られなかった。

「犬？」

「ええ。もう名前も決めてあるんです」

「エミリア、一体——」

状況についていけないまま、マグナスの声は元気な鳴き声によって掻き消された。

焦ったような表情の使用人に追いかけれ入ってきたのは、うつすらと見覚えのあるコリーだった。そう、マグナスの新品のズボンを汚した忌々しい子犬だ。

「これはダニエルの犬だった。処分するように言ってた筈だが」
「ええ。ですから、私がもらいました」

マグナスの厳しい声にもエミリアは動じない。それどころか駆け寄ってきた子犬を抱き上げると飄々とマグナスに楯突いた。

「ですが私、犬を飼うのが初めてなので…ダニエルに色々任せたい
と思ってるんです」

「何ということだ！私は許さないぞ」

「伯爵様」

マグナスは怒りに任せて声を荒げた。近くに座っていたダニエルは
怯えたように体を強張らせたが、構っている余裕はない。

エミリアはしっかりとマグナスを見ていた。先ほどのどこかお
どどした様子はなく、凜と背筋を伸ばしてマグナスの怒りを正面
から受け止めていた。

「先ほど伯爵様は仰いました。何でも欲しいものを言っていと。
約束を違えるのですか？」

今度はマグナスが言葉を失う番だった。そして軽々しく何でも言え
と言った数分前の己を全力で殴ってやりたい気持ちになった。

ふと隣を見るといつも俯いてまともに父親を見ようともしない息子
が、心配そうに自分を見ていることに気付いた。その目には期待と
怯えが見え隠れしている。

その目には見覚えがあった——幼いころの自分だ。マグナスはたっ
た一度だけ父親にこういう目を向けたことがあった。そのときもや
はり、愛犬を撃ち殺されそうになり幼い彼は必死に父親に乞うた。

——どうか、殺さないでほしいと。

その願いは遂に聞き届けられなかったが。

胸に苦いものが込み上げてきたマグナスはさっとダニエルから視線
を逸らした。

「好きにするがいい。ただし——」

「ええ、しっかり躡けることをお約束いたします」

エミリアのこれ以上ないほどの笑顔に、マグナスは心の中で再び毒づいた。

こんなことなら、新しい屋敷を強請られた方がよっぽどましだった。

すやすやと安らかな寝息を立てるダニエルの淡い金色の柔らかい髪を撫でながら、エミリアは長かった一日を終えることに安堵した。レックスと名づけられた子犬はエミリアの足元で体を丸めて眠っている。

マグナスに子犬を飼うことを許されたダニエルは大きな喜びを示すことはなかったが、元気に飛び跳ねる子犬を追う目は幾分きらきらと輝いているようにも思えた。まだ子供らしいというにはほど遠いが、少なくとも感情を表に出すことは出来た。一日目にしてはなかなかの出来ではないかとエミリアは一人ごちた。

まだエミリアのことを母と呼ぶ必要はない。ただほんの少しでもいいから心を開いて欲しい。そう思い、ダニエルが眠るまで傍にすることを決めた。初めは緊張気味にエミリアを見上げていたダニエルだったが、あやすようにゆっくりと胸を叩いているうちに疲れていたのかぐっすりと眠ってしまった。

ほのかな明かりに照らされた室内はレティシアのものよりもほんの少し大きく、そして息苦しかった。

部屋の所為だけではないのかもしれない。エミリアは重い溜め息をついた。まったく貴族というものは何をするにでもドレスを変えなくてははいけないのだ。

ただ単に夕飯をとるだけの為にフォーマルなドレスに着替えなくてははいけないと教えられた時は呆れて言葉が紡げなかった。この分ではダニエルや子犬と走り回る専用のドレスを誂えなくてはならないようだ。

家庭教師でいる間はドレスは一日一枚で済んだ。それも今着ているものよりもずっと動きやすいものだ。それに今流行だというドレスはエミリアが持っていた襟が詰まっているものとはまるで違い、胸

元が大きく開いている。食事中に限らず、正直なところ息を吸う度に気が気ではなかった。

もっとも、その部屋にはダニエルとマグナスの他には従者が数名いるだけで、夫であるマグナスは殆どエミリアの方を見ようとはしなかったが。

綺麗だと褒めて欲しかったわけでもないが、あそこまで無関心を装われると誰の為に着飾っているのか分からなくなる。誰の為にこんな派手なドレスを着ているのか。

エミリアはもう一度ダニエルの髪を撫で、音を立てないようにそつと立ち上がった。レックスは気配にこそ敏感にびくびくと耳を動かしたものの、目を開ける様子はなかった。

「一体どこに行っていたのだ」

宛がわれた自分の部屋に戻ったエミリアは目を疑った。そこは確かに昼間、ミセス・タリスにエミリアの部屋として紹介された場所に間違いはない。調度品も、白い壁紙も記憶しているのと全く同じだ。ただ一つ昼間と違うものがあるとすれば、部屋の中央でマグナスが仁王立ちしていることだ。その顔は不快感を隠そうともしていなかった。

「マグナス？こんな時間にどうしたのですか？」

「質問をしているのは私なのだがね、マダム」

うんざりといったような口調でマグナスは言ったが、エミリアはそれどころではなかった。どうしてマグナスがこの部屋にいるのだろうか。

いや、結論から言ってしまうえば夫が妻の部屋にいることに何の疑問も湧かないだろう。しかし二人は形だけの夫婦であり、初夜を拒んでしまった以上そういう雰囲気になることはまずないと思っていた。

「その…ダニエルの部屋にありました」

「ダニエル？今までずつとか？」

「ええ。彼が眠るまでは傍にいたいようと思ひまして」

マグナスの片眉が上がった。彼が何かを不快に思うときの癖だとエミリアは肩を竦めた。

「…あまり子供を甘やかすことには感心しない。ダニエルには自室があるのだ。部屋がある以上一人で寝るのが道理だろう」

——甘やかす？エミリアはマグナスの言っていることが理解できなかった。

眠るまで傍にいてやることのどこが甘えになるのだろう。寧ろダニエルは甘えることを知らないというのに。あのガラス玉のような感情のない瞳の裏には果てのない孤独があるのだ。

まだ幼い子供には家族が必要だ。使用人ではなく、心を預けられる家族が。

それを父親であるマグナスは知ろうとはしない。

「お言葉ですが、伯爵様。私はダニエルの母になる為に伯爵様と結婚いたしました。彼に寂しい思いをさせる為ではございません」

「寂しいだと？ダニエルがそう言ったのか」

「いいえ。ですがダニエルはもっと誰かに甘えることを学ぶべきです」

エミリアの口調はどこまでも凜としていて揺ぎ無かった。マグナス

は暗い室内の中で僅かな明りに浮かぶ彼女を暫く言葉も出ずに見つめていた。

まだ幼いからといってマグナスを甘やかしてくれる人間など、この邸にはいなかった。長年勤めているネルソンやミセス・タリスですら使用人としての一線を越えてはこなかった。

次代の当主として厳しく躰けられてきたマグナスにとって一人で寝ることは当たり前であり、それが特別なことだと思ったことは一度もないし、当然ダニエルにもそうするべきだと思っていた。

エミリアの言う通り、マグナスはダニエルの母となってもらうべく彼女と結婚した。しかし、マグナス自身母親という定義をよく知らない。

記憶に残る母親像と言えば社交界シーズンには連日連夜パーティに出掛け、音楽会やオペラの観賞会ととにかく忙しかったとしか言いようがない。彼女の愛するものと言えば金とラザフォード伯爵夫人という肩書、それから自身の美貌だった。息子など――幼いマグナスなど――彼女の興味を引く対象ではなかった。勿論、ある一つの例外はあったが。

誰かに頼ることは甘えだと思っていたマグナスにとって、甘えることを知るべきだと主張するエミリアの考えは新鮮であった。だが一方で強く反発する自分もいる。

甘えなど、高貴なる伯爵に必要なものか。甘えは己を弱くするものだ。

しかし無駄な論議をしている暇はない。マグナスは片手を上げて空気に漂っていた緊張感を絶った。

「結構。ダニエルに関しては君がしたいようにするがいい」

エミリアは知らず知らずのうちに強張っていた肩の緊張を解いた。マグナスがエミリアの考えを理解してくれたと言い難いが、少なくともダニエルに付き添うことを禁じられたわけではない。

「ありがとうございます、マグナス」

「喜ぶのはまだ早いと思うが」

マグナスの含みのある言葉にエミリアは再び息を詰めなければならなかった。彼は懷から何かを取り出すと、部屋のほぼ中央にある小ぶりのテーブルの上にそれを置いた。

「君に伯爵夫人としての最初の課題だ。ラグバード公爵夫妻からデイナーのご招待を頂いている。時間はまだあるがドレスの採寸などは明日にでも始めなければならぬだろう」

今度こそエミリアの心臓は止まった筈だ。いつそのことその方が大いに楽だったに違いない。

ラグバード公爵と言えば英国でもトップクラスの貴族だ。その名を知らないものなどこの国にはいないのではないだろうか。

エミリアがラザフォード伯爵夫人となってまだ一週間も経っていない。この屋敷にも慣れていないと言うのに、そんな大規模なパーティで失態を犯さずにいられるかまったくもって自信がない。

マグナスに視線を向けると彼は意気揚々とした顔でエミリアを見ていた。まるで彼女がこうして困ることを楽しんでいるかのように。悔しさで喉の奥が熱くなる。伯爵の思い通りの反応をしたらいけない。絶対に困った顔などしてやるものか。

エミリアは一旦深く呼吸をして自分を落ちつけると、背筋をぴんと伸ばしてマグナスと向き合った。

灰色の瞳と薄茶色の瞳が互いをそれぞれに映す。

「分かりました。伯爵様にご迷惑をおかけしないよう精一杯努力いたします」

「…頼もしい奥方で大いに助かる。今日は遅い。もう休みなさい」

エミリアの毅然とした態度に一瞬言葉を失ったマグナスだったが、すぐに眉を顰めると苦々しげにそう吐いた。そしてエミリアへの夜の挨拶もそこそこに荒々しく部屋から出ると、近くにいた使用人にシェリー酒を持ってくるように怒鳴り自室へのドアを開いた。代々の伯爵家当家が使ってきた部屋は歴史がある分、肺に通る空気にすら重みを感じる。この重みこそが自分の証明だ。

先ほどのエミリアの瞳を思い出し、マグナスは苛立たしげに黒髪をかきあげた。あの真っ直ぐな瞳を見ると腹立たしくて仕方がない。彼女が儚く涙でも流していれば、これ程までに苛立つこともなかっただろう。

一体なんだというのだ！そう大声で叫びたい衝動にも駆られた。マグナスが欲しかったのはあんな風に夫に楯突くような妻ではなかった筈だ。従順で甘い言葉を求めない、ダニエルの母となるに相応しい女性だ。決して、決して意思を持った強い瞳で自分を見るような女性ではない。

マグナスの知る限り——それも相当な数だと自負している——マグナスの会おう女性たちは少なくとも皆、表向きは従順だった。それは彼の後ろに大きな権力と財産があることを知っているからだ。社交界でも有名な彼を夫とすることにも大きな意味を持っていただろう。

常にマグナスの顔を窺い、贅辞の言葉を並べ機嫌を損ねないよう努力する。未来のラザフォード伯爵夫人の座はそれほどまでに魅力的だったのだ。

エミリアもいつそそういう女性だったらよかったのだ。野心に溢れ、子供のことなど関心を持たない婦人だったのならマグナスは彼女と結婚したりしなかったのに。

なのにエミリアはマグナスの持つもの一つとして魅力を感じてはいないようだった。マグナスを真っ直ぐ見据え、反論することに何の

躊躇いも覚えない。マグナスに愛想を振りまくこともせず、プロポーズすら最初は断った。

一体なんだというのだ。腹立たしいと思う半面で、彼女の意思の宿った瞳に映ることの心地よさは！

それは胸を掻き毟りたいほどの熱だった。

あのまま同じ部屋にいたら間違いなく熱の解放を求めているに違いない。それが余計にマグナスの自尊心を傷つけた。たった一人の女に感情を左右されるなど、あってはならぬことだ。

マグナスが行き場のない怒りを募らせている間にノックの音がし、使用人がおずおずとシェリー酒を持ってきた。

それをひったくるようにして取ると、マグナスはすぐにグラスにそれを注ぎ一気に飲み干した。焼けるような熱が喉を伝って心臓の鼓動を速めて行く。

だが、マグナスは分かっていた。何もかもを忘れたときに限って、酒は何も忘れさせてはくれないのだと。

翌朝目を覚ましたエミリアは、寝心地のいいベッドと美しい模様が描かれている天井の説明をつけるのに一旦ぐるりと部屋を見渡さなくてはいけなかった。

数回瞬きをした後、ぼんやりとした思考が次第に冴えてきて全ての記憶が脳裏によぎった。僅かに足を動かすと、滑らかなシーツが肌を心地よく擦った。

ここに来て最初の朝だ。外は重苦しい雲が数時間後の雨を予測させている。

ベッド脇の化粧台にはすでに洗顔用のお湯と水が用意されていた。

エミリアはそれで顔を拭くと、ベルを鳴らして小間使いのドリーを呼んだ。

ドリーはエミリアよりも4つ年上の元気のいい女性で、手早く支度を整えたり髪を結ったりしている間も楽しそうに鼻歌を歌ったりエミリアに意見を聞いたりした。エミリアはドリーの質問に一つ一つ丁寧に答えながら、時々調子が外れる鼻歌に笑いそうになるのを必死で堪えた。

身支度が済み、階段を下りて朝食用の部屋へと入った。テーブルにはすでにダニエルがついていたが、マグナスの姿は見えなかった。控えていたネルソンに尋ねてみると、マグナスは今朝早くに近くの領地にある友人宅へ出掛けたと告げられた。

「滞在は1、2週間程度だそうです。入用がございましたら私にお申し付け下さい」

「そう…ありがとうございます」

エミリアは胃が下がっていくような息苦しさを感じた。新婚早々に1週間以上も妻を置き去りにする夫がいるだなんて！それも正式に

この女主人となつて1日も経つていないというのに。

それはいかにマグナスがエミリアのことを気にかけていないかを示しているようだった。知らず知らずのうちにエミリアの口から重い溜め息が零れる。

昨夜はマグナスの思い通りになるのが嫌であんな強気な態度を取つてはいたが、内心不安で仕方ないのだ。貴族同士の繋がりもなく、友人もいない彼女にとって夫だけが唯一の頼りであつたのに。

マグナスはあっさりとエミリアの頼りの綱を切ってしまったのだ。ディナーパーティーまでそれほど時間がないのはよく分かっている。だからこそ恥をかかないよう入念に準備が必要だ。

新しいドレスの裁縫、ダンスの練習、貴族たちの関係、社交界を取り仕切る夫人たちのことも知らなくてはいけないだろう。考えるだけで頭が痛くなつてきそうだ。

ダニエルが不安そうにこちらを見ているのに気付き、エミリアは慌てて笑顔を浮かべる。不安になつても仕方がない。こうしているうちにほとんどん時間は過ぎて行くのだ。

せめてマグナスがいない1週間、ネルソンやミセス・タリスの力を借りて自分なりに出来る限りを頑張ろう。

そしてマグナスのあの冷たい瞳を驚愕に染めてみせるのだ。決して恥をかかせることだけはあつてはならない。

次々と目の前に並べられる美味しそうな朝食を目の前に、エミリアはそう誓つたのだつた。

湿った空気を肺いっぱいに入れながら、マグナスは落ちつかない窓の外を見た。見慣れた景色が遠ざかり、辺り一面が深い緑に染まると同時に重苦しい溜め息が零れる。

昨夜の苛立ちから抜けきれず、朝食もそこそこに衝動的に友人宅へと向かっているが、よくよく考えてみればなんと愚かなことか。まるでエミリアから逃げているようではないか。逃げるなど騎士道精神に反している。

なにも急に友人を訪ねるようなまねをしなくても、朝食に降りてきたエミリアに冷やかな挨拶をすればそれで済んだ筈だ。

マグナスは再び溜め息をついた。感情を押し隠すのは人一倍得意だと思っていたのに。その自負はエミリアの前ではまったく言っていないほど役には立たない。

しかし今更屋敷に戻るなど以ての外だ。久しぶりに友人を訪ねてみるのもたまにはいいだろう。

大学時代からの悪友はきつとマグナスをこの不可解な感情から解き放ってくれるに違いない。狩にカード遊び、夜通し飲む上等な酒でいつもの自分に戻れるのだ。

マグナスは信じていた——昨夜から続く胸を焦がす苛立ちは、ほんの一時のものであると。そして、それは簡単に消せるのだと。

*

「こちらでございます。ラザフォード卿」

執事に案内され、マグナスは応接間へ足を踏み入れた。グランヴェル家よりも些か華美な家具はしかし、城のようなこの屋敷に絶妙な優雅さを与えていた。趣味よく配置された家具に大きな明るい窓。壁の上には数代前の王直々に贈られたという肖像画が掛けられ、こ

の部屋に入る全ての人物に睨みを利かせている。埋め込み式の暖炉の中央にはこの屋敷の主人自慢の獅子が精巧に彫られていた。歴史が隅々から感じられる部屋を一通り見渡すと、マグナスは近くにあった背の広い椅子に腰を落ち着けた。赤地に金の織りが入っているその椅子は座り心地もとてもよかった。

「君から訪ねてくるだなんて驚きだな」

やがて陽気な声と共に執事に伴われた友人が姿を現した。

マグナスよりも数年遅れて侯爵位を受け継いだこの男は、薄い金髪の巻き毛が特徴の好青年であった。学生時代から人当たりがよく、明るい性格だったため、いつも周りには友人が溢れていた。

マグナスとは一見正反対に見えて強かなところもあり、今日までなにかと縁が続いている。マグナスの亡き妻も実は青年の遠縁にあたるのだ。

「突然すまないな、リチャード」

「いや。久しぶりに会えて嬉しいさ」

世の婦人方を騒がせる爽やかな笑みを浮かべ、リチャードはマグナスの向かいの椅子に座った。その目はまるで子供のように輝いており、マグナスの胸にさつと嫌な予感が走った。

「それで？親愛なる我が友人、ラザフォード卿の奥方にお目見えは叶わないのかな」

悪戯っぽく聞いたりリチャードに、マグナスはやはりと眉を顰めた。出来れば今は彼女の話をしたくないのが本音だった。

何しろ昨日の今日だ。エミリアの真っ直ぐな瞳は未だマグナスの神経を焦がし続けているし、同時に怒りの感情も消えてはいない。第

「一、マグナスがエミリアについて友人を初め他人に語れるものなど驚くほど少ないのだ。」

一言でいえば、ひどく強情な娘だ。自分が弱い立場であろうとも決してそれを認めようとしないのだから。

マグナスは何とかりチャードの気を別のところに逸らせないかとも考えたが、それは難しいこともまた長年の友人関係から知っていた。リチャードの興味を削ぐのはなかなか骨が折れる。

彼は間違いなく今回のマグナスの結婚に興味を持っている。

何しろサリアナがダニエルを産んですぐに亡くなってからもマグナスは二度と結婚はしないと常々言っていたからだ。その言葉通り、遊びこそすれどマグナスは結婚する気配など微塵も出してはいなかった。

それがたった数カ月会わなかった間にマグナスは新しい妻と家庭を築こうとしている。それも元々は妹の家庭教師だと言うではないか。そんな噂を無視しろという方がどうかしている。

「君のところにも来ているだろう？ ラグバード公爵からのディナーの招待状だ。そこに妻を連れて行こうかと思っている」

マグナスは観念したように溜め息をつく、そう切り出した。下手に話をはぐらかすよりも素直に話し、さっさと話題を変える方が利口だと考えた。

「ああ。確かきていたはずだ。へえ、じゃあそれまでお預けつてとか。楽しみに待っていたところだが、もう少し彼女に対してのヒントが欲しいな」

「なんだと？ 他人の妻を詮索するなどどうかしている」

「確かに。けど考えてみてくれ。僕はまだ独身だし、当分結婚するつもりもない。まだまだ色んな花を楽しみたいんでね。だが侯爵家の嫡男としていずれば妻を娶らなくてはいけない。絶対不落の氷の

伯爵とまで言われた君を落としたのがどんな女性か今後の為に参考にしても罰は当たらないだろう？」

滅茶苦茶な理屈を並べられ、マグナスは微かに頭痛を覚えた。これは一から十までマグナスが話すまでは決して諦めてはくれなそうだ。まったくこの友人は普段温和なだけに、こういうときはなんと少しでも食い下がる。それは称賛に値すべきかそれとも彼の短所として捉えるべきか。

「いいだろう。だが君が欲している答えかどうかは保証できない。私はダニエルの為に彼女と結婚したのだから」

その瞬間、僅かにリチャードの眉が寄った。その理由をマグナスはよく分かっている。マグナスの秘密を彼以外に知る唯一の人物がリチャードだからだ。

秘密は己の弱さを露呈することとなるが、同時に強い心の支えを得る機会にもなる。その秘密を持った時、マグナスは生涯誰にも話すまいと誓った。だが長年の友人はマグナスの些細な異変すら見逃してはくれなかった。

正直に話し終えた時、マグナスはリチャードに聞いた。社交界中に話すかと。スキャンダルになるには充分な要素であったし、マグナスをよく思わない人々なら喜んで貴族たちに吹聴して回っただろうが、リチャードは首を振った。

彼は今日に至るまでその約束を破ったことはなかったし、そしてこれからも破ることはないだろうとマグナスは確信している。

暫く沈黙を置いた後、リチャードは静かに「そうか」とまるで独り言のように呟いた。視線はマグナスではなく、重厚な絵が描かれている天井へと向けられていた。

部屋の重厚さに負けないほどに、今や二人を取り巻く空気は変わっていた。

「君の奥方は…その、あのことを知っているのか？」

マグナスは笑った。そしてそれはリチャードへの答えでもあった。エミリアにマグナスの秘密を話すつもりはない。勿論エミリアに限ったことではなく、マグナスは妻となった女性に初めから何も打ち明けようとは思っていなかった。

恋愛をして夫婦になる男女など一握りだ。多くは結婚してから恋愛を楽しむ。だがマグナスの場合そのどちらでもなかった。

愛ほどマグナスが信用していないものはない。目に見えぬものに根拠などないし、形を変えぬ気持などどこにもないからだ。信用していないものに、どうして自分の秘密を託せようか。

愛などなくても夫婦として形は保てる。夫として最低限の事はするつもりだ。エミリアには何不自由のない生活を与えることを保証する。好きなだけドレスを仕立てればいい、社交界の華となるべく寶石に身を包み夜ごと音楽会や舞踏会に繰り出したって構わない。

マグナスが彼女に望むのはただ一つ、寄宿学校へ入れるまでダニエルが跡取りとして不足なく育つことだけだ。

リチャードはなおも戸惑っているようだった。だがそれ以上続けなかったのは、彼なりの気遣いだったのだろう。リチャードは努めて明るく、ダニエルの事を聞いてきた。

「ダニエルにも暫く会ってないな。元気か？」

「どうだろうな。私が留守の間、病気をしたとは聞いていない」

「呆れたな。そんなんじゃダニエルも寂しがってるんじゃないか？」

リチャードの言葉にふと、忘れていたと思っていたエミリアの言葉が脳裏に甦る。そしてその声は、思い出す彼女の瞳は、絶え間なくマグナスの胸を熱くさせた。

そんな感情を振り切るかのように、マグナスは自嘲気味に笑った。

「妻にも同じことを言われた。ダニエルは誰かに甘えることを学ばべきだと。私には理解できないがな」

僅かにリチャードの口角が上がったのをマグナスは見逃さなかった。先ほどよりもいつそう笑みを深くして、彼は意味ありげに手を組んだり唇を指で触れたりした。

何か企んでいる時のリチャードの癖だ。

「なんだ？」

「いや。随分素晴らしい奥方じゃないか。ますます興味を持ったな。どんなに魅力的な女性なのか、ディナーパーティーが待ちきれない」

マグナスは不可解そうに片眉を上げた。素晴らしいかどうかなど、エミリアに会ったことも無いリチャードがどうして分かるというのだろうか。

確かに彼女は今までマグナスが会ったどの女性像にも当て嵌まらない。背はマグナスの目線よりもずっと下であるし、一度だけ腕を回した腰はこちらが心配になるほど細かった。かと思えばマグナスに対しては毅然とした態度を取り続けるし、いとも簡単にマグナスの神経を逆撫でする。

確かに腹立たしいが、それは他の女性たちに感じたものとはまったく別の苛立ちであるようにも思えた。それが何なのかは説明がつかないが。

リチャードの言葉はマグナスの胸の奥に小さな棘を刺す。自分の妻が他の男に興味を持たれるのは何故か不愉快だった。

彼女には何も言わず屋敷を出てきたことを今更ながらに後悔し始めている自分にマグナスは驚いた。

いや、屋敷にはネルソンもミセス・タリスもいるではないか。彼ら

には私の留守中しつかりとエミリアを助けるようにと言っておいた。私がいなくても彼らはしつかりとやってくれるだろう。

今頃エミリアはディナーパーティに向けて新しいドレスの採寸をしている最中であろう。マグナスは流行の生地の薄いドレスを着た妻を思い描いた。モスリンの生地が柔らかく包み、あの真珠のような肌がうつすらと透けてみせる。

急に体が熱くなり、喉の奥が渴いた。そんな妻の姿を他人の目に晒すなど、考えてもみなかった。

遂に堪え切れないといったように、それまで黙ってマグナスを見ていたリチャードは肩を震わせ笑いだした。

「何が可笑しい」

「マグナス、一体自分がどんな顔をしているか気付いているか？鏡でも見せたやりたいよ」

「なんだと？」

「一つ僕から忠告だ。君は必ず今日僕に言った言葉を後悔する」

リチャードの自信たっぷりな言葉も今のマグナスには嫌味にしか聞こえなかった。後悔など、自分の屋敷を出てきた瞬間から何度もしているからだ。

エミリアは疲れきっていた。肉体的にも、精神的にも。

中流階級に生まれた者なら一度は貴族の生活に憧れるだろう。彼らは仕事をすることを恥じと考え、浪費こそ美德と考える。社交シーズンになれば連日パーティに追われ、常に流行のドレスに高価な宝石を身につける。

勿論結婚相手も家柄や財産を基準に選ばれ、その後の生活もほぼ保証されたことになる。つまりのところ借金まみれになったり、スキヤンダルを起こしたりしなければ一生遊んで暮らせるのだ。

そんな墮落した生活などと強がる一方で、華やかな貴族の女性に憧憬を持つのは当たり前のことだろう。エミリアだって幼い頃はきらきらと輝くドレスを着る女性になりたいと思っていたものだ。

だがそんなもの所詮夢物語だということを、エミリアはここ数日以身を以て知った。

貴族の一員であるということは決して楽なことばかりではないのだ。まず、3日間続けてフランス人の仕立屋が伯爵家に訪れ、夜会用のドレスを4着と昼間用のドレスを3着作ると言っていた。もうすでにたくさん持っているというのに。

しかもその後に来た裁縫師が得意げに持ってきたドレスの中には肌が透けて見えるものもあり、エミリアは顔から火が出るほど恥ずかしい思いをした。出来るならばシュミーズドレスは着たくないが、これが流行なのだと断言されてしまっただけでは受け取らずにはいられない。

これを着た時マグナスがどんか顔をするのか少しだけ見てみたい気持ちもあったが、恐らく片眉一つ動かしてはしないだろう。

何しろ結婚してから見た、マグナスの表情と言えればあの不機嫌そうに歪んだものだけだったからだ。

一日の半分がドレスの採寸で終わったかと思えば、次はダンスのレッスンが始まる。いずれ必要になるだろうと付けられたのだが、エミリアは数日で一気に基本を覚えなくてはならなかった。

ダンス教師の言うとおり足運びながらエミリアはほんの2か月の平和な日々を思い出した。平凡で単調な毎日がとても恋しかった。昼間はレティシアの家庭教師をして気の合うメイドたちとのささやかなお喋りを楽しみ、夜はレティシアが寝付くまで傍にいて明日のことを思いながらベッドに入る。

今は一日中屋敷で働く人たちに傳かれ、気ままなお喋りすらすることも無くなっていた。思えば初日の夜以来、ダニエルともゆっくり過ごしていない。一日中疲れを引きずっている所為で、食事の時間すらダニエルの方をまともに見ていないんじゃないだろうか。

これじゃいけない。そう思ったエミリアはダンスのレッスンを早めに切り上げてもらい、急いでダニエルの部屋に向かった。

彼には乳母のナタリーが付いているが、お世辞にも懐いているとは言い難い。ナタリーは自分のすることに口出しは無用とばかりにエミリアを睨むし、元家庭教師が伯爵夫人になったことが気に食わないようにいつもエミリアに対してつんとしている。

もしダニエルと遊ぶことに嫌な顔をされても放っておけばいい。私はここの女主人なのだ。そう自分に言い聞かせ、歩く速度を速める。2階へと続く専用階段を上ると奥にあるダニエルの部屋の前に、なぜか数人の使用人がおろおろとしているのが目に入った。そこにはミセス・タリスやネルソンの姿もあり、心配そうに部屋の中を覗いている。

部屋に近づくと中からダニエルの泣き叫ぶ声と、ナタリーが何か言う声が聞こえた。異様な雰囲気自然と足も速くなっていく。

「どうかしたの？」

おもわずエミリアが声をかけると、振り返ったミセス・タリスが困ったように眉を下げた。

「奥様：それが――」

彼女の言葉は何か割れる音で遮られた。慌てて中を見ると部屋はそこらじゅうに物が散乱していて、この前入った時とはまるで違う様をしていた。

ダニエルがカーペットの上に座って泣きながら物を投げつけるのをナタリーが必死で宥めている。だが彼女の声が届いていないのかダニエルはいつそう大きく喚いた。

「一体どうしたというの！」

エミリアが急いで2人の間に割って入っても状況はあまり変わらなかった。額に汗を滲ませたナタリーはほつれた髪を直しながらエミリアにきつい視線を向けた。

「奥様には関係ございません。いつものことですから私にお任せ下さい！」

これがいつものことで片づけられるのだろうか。ダニエルはちっともナタリーの言うことを聞こうとはしないし、それを宥めようとナタリーが大声を出す為に更に状況は酷くなっていく。

すぐにミセス・タリスの方を向き、エミリアは聞いた。

「こういうことは今までに何度かあったの？」

「え？ええ、いつもは大変大人しいのですけれど、ときどき突然」

「どういう時が多い？」

「そうですね：旦那様が留守の時や使用人たちが忙しい時が多いよ

うな気がします」

エミリアはその言葉にはっとした。

ダニエルは寂しいと言葉にする術を知らないのだ。まだこんなに小さな子供なのに誰もその寂しさに気付いていなかった。彼は言葉にする代わりに物を投げ、癩癩を起して自分という存在を認識して欲しかったのではないか。

寂しい思いをさせるなとマグナスに言っておきながら、いつの間にか自分のことに精一杯になっていたことに気付きエミリアは自分の不甲斐なさに涙が出てきた。私だって何も分かってはいなかったのだ。

忙しさにかまけてダニエルの気持ちを知らうとしなかったのは私の方だ。

腕を伸ばしてダニエルを抱き上げる。涙の跡の残る柔らかい頬を撫で、エミリアは力一杯彼を抱きしめた。

「ごめんなさい。寂しかったのでしょうか？もう泣かないで」

途端にぴたりと泣き止んだダニエルは、じっとエミリアを見つめる。ブルーに近いグレーの瞳いっぱいエミリアの顔が映った。

その場にいた誰もがおもわず息を飲んだ。今まで誰が宥めても疲れて眠ってしまうまでダニエルが泣きやむことはなかったのだ。ナタリーでさえじっとエミリアの動向を窺っていた。

「ネルソン」

「はい、奥様」

「今日これからと明日の予定は全て取り消します。明後日からは出来る限り時間を詰めて、午後を空けるようにしておいて欲しいの」「畏まりました」

内心驚いているだろうに、ネルソンはそれをおくびにも出さずにいつものように礼儀正しく返事をした。戸口に立っていたミセス・タリスは温かい笑みを浮かべながらエミリアを見ており、それだけで彼女がエミリアのしたことを快く思っているのだと分かる。ナタリーは呆然と2人を見上げていたが、やがて何も言わずに部屋から立ち去ってしまった。

今までダニエルの面倒を見てきたのはナタリーだ。彼女の働きはこれからも期待したいし、出来れば仲良くなりたい。後でゆっくりと話し合う必要があるそうだとエミリアは思った。

ダニエルはすっかりエミリアに体重を預けて大人しくしていた。新品のドレスは幾らか汚れてしまったが、エミリアはちっとも気にならない。きっとこの屋敷の優秀な洗濯婦たちが、仕立てた時と同じようにしてくれるだろう。

エミリアは決めていた。もう何があってもダニエルに寂しい思いはさせないと。

「じゃあダニエル、何をして遊びましょうか。レックスと庭を走り回る？それとも湖の近くまで散歩しましょうか？」

ダニエルはにっこりと笑って言った。

「ひみつのとこー」

それから5日後の午後にマグナスは帰ってきた。予定していた2週間よりは3日も早かったが、それでもマグナスには充分長い時間リチャードの屋敷に滞在していたような気がしていた。

久々にリチャードとカード遊びに耽ったり、遅くまで酒を飲んだり領地にある森へ狩へ出かけたりとそれなりに楽しむことが出来たがマグナスの注意は殆ど別のところにあつたと言っても過言ではなかった。

リチャードの屋敷にいる金髪のメイドを見る度にもわず振り返ってしまったり、珍しくチェスで読みを誤ってしまったりと散々だった。

その度にリチャードが意味ありげな笑みを寄こすのにもうんざりだったし、さすがに自分が平常ではないと悟ったマグナスは今朝早く挨拶もそぞろに屋敷を後にした。

窓の外の景色が見慣れたものになるに連れ、マグナスは今までに感じたことのないような安堵を覚えた。その理由がなんなのかは深く考えないことにした。

ポーチの前では突然帰ってきた主人に使用人たちが慌てて列をなしていた。ネルソンとミセス・タリスだけはいつも通りであったが。馬車から下り、馬車がキャリッジ・ポーチへ向かってくの見送った後マグナスはネルソンに尋ねた。

「なにか不都合はなかったか？」

マグナスが屋敷を空ける度に聞いてきた言葉だ。いつもはその問い

に難しげな顔をしてネルソンは答えていたが、今回は違った。

「いいえ。ございませんでした」

「なかった？ダニエルは癩癧を起さなかったのか」

いつそ晴々しいような表情でそう言われ、マグナスはおもわず聞き返していた。今までマグナスが屋敷を空けている間、ダニエルが問題を起さなかったことなど一度もなかったからだ。

それがこのたった1週間かそこから変わるわけがない。長年ダニエルの面倒を見てきた乳母ですら手に余っているというのに。

「いえ。旦那様がお出かけになられてから4日後に。ですが直ぐ奥様がその場を収めました」

マグナスは耳を疑った。あれ程手を焼いていたのに、一体彼女はどんなことをしたというのだ。

「…奥方はどこにいる」

「ダニエル様とご一緒に庭におられます」

足は自然と庭の方へ動いていた。

エミリアとダニエルは噴水の近くで疲れた身体を休めていた。レックスが傍に来てもつと遊びたいというように元気よく吠える。

だがダニエルの興味は既に別のものへと向けられていた。ダニエルが手に持っているのは金色のロケットリングであった。

例の庭にある館の茂みの中からレックスが咥えてきたもので、細かな彫刻がとても美しいリングだ。蓋を開けると天使の彫刻が彫られ

てあり、蓋の裏側にも何か文字が刻まれていた。

残念なことに文字は後から消そうとしたのかとところどころ削られており、よく読み取れなかったが、きっと誰かが愛する人に贈ったものなのだろうとエミリアは胸をときめかせた。

それ程古いものではないようだし、もしかしたらマグナスが誰かに——そう思った時、エミリアの胸の奥が小さく痛んだ。本人ですら気の所為かと思うほどの微かな痛みではあったが、エミリアはおもわず自分の左胸を押さえていた。

マグナスの口から前妻のことを聞いたことはなかったし、その必要も感じてはいなかった。だがマグナスの容姿を受け継いだとしても、ダニエルを見れば亡くなった奥方がどれほど美しいか想像に容易いきっとマグナスの隣に立つても見劣りせず、堂々としていられる人だったのだろう。

エミリアは無意識にダニエルの金色の髪を撫でた。ふとマグナスの髪色は黒でもっと硬質のようだったことを思い出し、ダニエルの髪色は亡き奥様から受け継いだのだと分かった。自分と同じ色だ。

これから先、どんなにエミリアが伯爵夫人としての教養を身に付けたところで叶うことのない人。マグナスはエミリアの金髪を見る度に亡き奥様を思い出しているのかもしれない。もしあのロケットリングを贈ったのがマグナスならば、彼はとても奥様を愛していたのかもしれない。

それは何故かととても——とても悲しいことだった。

「エミリア」

噴水の傍でダニエルの頭を撫でているエミリアを見つけたとき、マグナスの心臓は不自然に跳ねた。1週間ぶりにあった妻は、最後に見た時よりも洗練され美しくなっているような気がした。

金色の髪は陽の光を受けてきらきらと輝き、何かを考えているように伏せられた睫毛が瞳を飾っていた。

一瞬言葉を失い、どう声をかけていいのか分からなくなった。こんなに狼狽えたことは初めてで一度喉を鳴らすことで平静を取り戻そうと必死になった。

その結果、口から零れたのは彼女の名前であつた。

エミリアは弾かれたように顔を上げ、目一杯瞳を大きく開き、マグナスを映した。隣にいたダニエルもそれに倣い、マグナスの方を振り返る。

「マグナス？いつお帰りに…」

「ついさっきだ」

「お迎えもせずに申し訳ございません。お疲れでしょう」

「いや」

驚いたことに、馬車の中で感じていた疲労はすっかり消えていた。代わりに数日忘れていた熱が再びマグナスの胸に甦る。

エミリアの気遣わしげな視線はマグナスを落ちつかなくさせ、おもわず目を逸らす。彼女の細い指先はダニエルの髪を梳き、優しく撫でていた。

「お帰りなさいませ」

僅かな沈黙の後、エミリアが発した言葉は更にマグナスの心臓を熱くさせるのに十分な威力を持っていた。その言葉を言われたのは初めてのような気がした。何故だかとても温かい。

躊躇いながらもエミリアへ手を伸ばそうとした時、ダニエルが持っている指輪に目を奪われた。

途端にあれ程熱を放っていた心臓が、凍りついたように冷たくなっていく。

「それを…」

「え？」

「一体それをどこで見つけた！」

先ほどとは打って変わって声を荒げたマグナスにエミリアもダニエルも怯えたように肩を竦ませた。鋭い視線はしっかりとダニエルの持つている指輪に注がれ、恐ろしいまでに見つめている。

「まあいい。それは私のものだ。今すぐ返してもらおう」

マグナスの言葉にダニエルが首を振る。彼が一目でこのリングを気に入ったのはエミリアにも分かったが、今回ばかりはマグナスに頼もうという気持ちすら起こらなかった。

あまりにもマグナスの発する気が冷たかったからだ。

エミリアが宥めるようにダニエルの背中をさすると、一瞬泣きそうな顔をしてダニエルは大人しく指輪を離れた。すかさずダニエルを抱き、「いい子ね」と言いながらマグナスに指輪を渡す。

これ以上こんな緊張の中にいるのは耐えられそうにもない。

指輪を受け取ったマグナスはそれを乱暴にポケットにしまうと、何も言わず踵を返して行ってしまった。

その背中からは何も分らないが、エミリアは過敏なまでのマグナスの行動に何か言いようのない不安を感じていた。

明るく庭を照らしていた太陽を雲が覆い、彼らの影を簡単に消していった。

14（前書き）

ほんのりR気味な描写がございます。
苦手な方はご注意ください。

重苦しい音を立てて風がエミリアとダニエルの間を通った。一瞬息をするのも苦しいと感じるような強い風だ。

2人の頭上を薄暗い雲がどんどん過ぎていく。空気は湿り、そこら一带を雨を予感させる匂いでいっぱいにした。

去っていくマグナスの後姿をエミリアはただじっと見つめていた。どんどん小さくなりやがて屋敷の中へと消えていく背中には、言葉では表せないほどの重い「何か」が押し掛かっているようにも見える。

その何かがエミリアには分からないし、きっとマグナスもエミリアに分かつて欲しいとは思っていないだろう。

ほぼ二週間ぶりに会った夫は相変わらず何もかもが完璧だった。冷たい雰囲気さえええマグナスを飾る装飾品となる。

久しぶりの再会にも妻に優しい言葉一つくれない夫——いや、優しい言葉が欲しかったのではない。ただ、出ていく前と変わらないマグナスの態度で、エミリアを少しも恋しく思っていないことが分かって悲しいのだ。

ここ二週間でエミリアの周りは忙しく変わっていった。教師やミセス・タリスに教わり、完璧とは言えないまでもある程度貴族のマナーは身につけたと思っっているし、ドレスも伯爵夫人に恥じないフランス式の流行のドレスを揃えた。

似合っているかどうかは別としても特訓の成果は確かに現れていると言っていいだろう。

ダニエルの乳母であるナタリーとは未だ打ち解けられていないが、他の使用人は段々とエミリアを信用し始めている。あのダニエルの一件が大ききっかけとなったのは間違いないだろう。

せっかく見つけた指輪をマグナスに取られてしまったダニエルは暫く唇を尖らせてエミリアのドレスの裾を掴んでいたが、やがてレッ

クスと一緒にになって綺麗に刈られた芝生の上を走り回り始めた。
あの日から随分ダニエルは変わったと思う。エミリアの前では時々笑ってくれるようになったし、一生懸命言葉を繋げてくれるのをもとても嬉しい。夜寝るときはエミリアの片手をしっかりと掴んで離さないし、レッスンが終わるまで部屋の外で待っていてくれた時はおもわず抱きしめてしまった。

今ではダニエルのベッドで寝ることが多くなり、レッスンの間はダニエルの為に部屋の隅に椅子が置かれるようになった。

そんな息子の変化にマグナスは気付いていないのだろうか――？
向こうから手に一輪のマーガレットを持ったダニエルが走ってくる。頬は子供らしく紅潮し、安定しない芝生の上で転ぶのではないかとらはらしたが予想以上に地面を踏みしめる足取りはしっかりとっていた。

エミリアは腰を屈め、腕を広げてダニエルを待った。飛び込んでくる体温の温かさや太陽のような香りを抱きしめる。

ダニエルの小さなふくらとした手がエミリアの髪に触れ、摘んできたばかりのマーガレットを髪に挿した。彼は自分と同じエミリアの髪色を気に入っているのか、最近頻りに触ってくる。

エミリアが同じようにダニエルの髪を撫でると嬉しそうに口元が綻んでいく。

「そろそろお屋敷に戻しましょう、ダニエル。雨が降りそうだわ」

マグナスは手の中の指輪を見つめた。精巧なデザインは一目で高価だと分かる。

蓋の裏には――今は文字が霞んで読めないが、マグナスは一字一句間違えずに覚えている――こう書いてあった。

> 永久の愛の証に<

手の甲が白くなるまできつく拳を握る。

胸を燻っているのは自責の念なのか、後悔なのか。いや私が何をしたというのだ。

マグナスはもう一度指輪を見つめた。甦るのは苦い思い出だけ。しかし例えあの頃に戻れたとしても、マグナスにはどうしようもなかったことだ。

窓の外にはずっしりとした灰色の雲が太陽を覆い隠していた。束の間の晴天は嵐を呼ぶ。今や先ほどまでの太陽は見る影もなく、風が窓ガラスを揺らし庭の木を薙ぎ倒さんばかりに強く吹いている。懐中時計を取り出すと帰って来てからまだ1時間と経っていないことが分かった。

エミリアとダニエルはもう部屋の中に戻ったのだろう。二人がいた場所にはもう何もなかった。

その時ドアをノックする音が聞こえ、マグナスは急いで指輪を引き出しの中に閉まった。小さな木の箱の中で指輪が固い音を立てる。とつさにネルソンだと判断したマグナスは相手が誰かも確かめずに入ることを許可してしまった。

重厚なドアの隙間から金色の髪が見えた時には心の底からそれを後悔したが。

「お邪魔して申し訳ありません」
「構わない。入りなさい」

おずおずと一步を踏み出す彼女はもうあの貧相な家庭教師ではなかった。

首元を覆っていた忌々しいドレスは姿を消し、代わりに着ているのは胸元が開いた流行のドレスだ。ほっそりとした肩に浮き出た鎖骨、胸のすぐ下で絞られた細身のドレスは小柄な彼女によく似合っている。淡く光を放つ髪には白いマーガレットの花が一輪飾られており、マグナスはあの初夜の時と同じような渴きを覚えた。

まだ胸の開いたドレスに慣れていないのか、彼女はマグナスと目が合いそうになるとさっと視線を落とす。僅かに頬が赤くなっているのは羞恥からなのだろうか。

「なにか用でも？」

胸の奥で荒れ狂う感情を抑えつけ冷静にそう聞く。持てあました両手は不自然に机の上に置いてあった手紙——それもはっきり言ってどうでもいい——を整理し始める。

それも、まるで今までそれらに熱心に目を通していたかのように。

「その…ダニエルのことでお話がございます」
「ダニエルの？」

てつきりさっきの指輪について聞かれるものだと思構えてたマグナスは少しだけ恰好を崩した。だがエミリアの目は真剣そのものだ。何かを決意しているかのように結ばれている唇に胸の前で固く組まれた両手。これではまるで私が彼女を取って食うみたいではないか！内心で妙な苛立ちを覚えながら、マグナスの手は手紙の返事を書く

為に忙しく便箋の上を動く。スベルを間違えようが、ピリオドに余計な力が入ってしまい大きな染みができようがどうでもいい。どうせこの返事は相手に送られるものではないのだから。

「ダニエルはどうしているんだ」

「疲れたようで、部屋で休んでおります。今日はレックスとたくさん走り回りましたから」

「走り回っただと？」

エミリアの発言の所為で今度は”r”がひどく不格好になった。だがダニエルが走り回るような子供だとは思いついたのだ、驚いて当然だろう。

「最近をよく笑うようにもなっただんです。言葉もたくさん覚えました。彼は学ぶことも好きなようです」

正直に言ってマグナスはこれ以上ないほど驚いていた。自分や優秀な使用人たちが3年間頭を悩ませていた問題を、エミリアはたった2週間で打破してしまったのだから。

やはり彼女を妻にして正解だった。多少は希望に添えない部分もあるが、一番の条件である良き母の部分については文句の言いようがない。他のどの女性であつてもエミリアほどの成果を出すことは叶わなかったであろう。

「素晴らしい。君には感心させられる」

「ありがとうございます。私、ダニエルが大好きです。ですから彼の母になれてとても嬉しく思ってるんです」

エミリアの笑顔を見たのは、初めてであつた。

それは文字通り、花の綻ぶような笑顔で途端にマグナスの胸を締め

付ける。彼女の初めての笑顔の理由がマグナスが与えたどれでもなく、息子だとは少々面白くないが、悪くはなかった。不自然な心臓の高鳴りは、今にも部屋に響きそうだ。自分を落ちつかせる為に軽く咳払いをするも、どことなくぎこちない。

「それで？君の話というのはそれだけか」

「いえ、あの…実はもう一つお願いがあるんです」

今度は眉を顰めざるを得なかった。エミリアの願いは金も時間もかからないが、マグナスが知るどれよりも厄介だ。視線を上げじつと彼女がその”お願い”を口にするのを待った。

「あの…少しでいいのです。もう少し、ダニエルを見てください」

「またも不可解な”お願い”だ！

勿論エミリアが言っているのはダニエルともっと向き合えということぐらいは分かる。だがそうしたところで一体何になるのだ。

この3年間、マグナスは出来るだけダニエルと関わらないようにして生きていた。それが今更どう向き合えというのだ。現に息子もマグナスを恐れている。マグナスが父にいい感情を持っていなかったのと同じように。

父は偉大であったが決して尊敬の対象にはならなかった。

だがここでそう言ったとしてもエミリアには理解されないだろう。マグナスは頷くと嘘を吐いた。

「分かった。努力しよう」

「ありがとうございます！きっとダニエルも喜ぶと思います」

それはどうかとは口に出さなかった。せつかく終わった話をまた蒸し返す必要もないだろう。

マグナスは再び手紙に視線を落としたが、エミリアが出ていく気配がない。訝しげに思つて再度顔を上げると、彼女はまだ何か言いたそうにこちらを見ていた。

マグナスの視線に気づき、はつとしたエミリアは急いで口を開くが言葉にはならかつたようで頼りない吐息だけが零れていった。

「まだ、何か？」

仕方なく思いながらもマグナスが先を促す。

「その、マグナスは何か悩みことがあるのではないですか？」

「何故そう思う」

「それは…いえ、根拠などはないのですけど」

段々と小さくなっていく声にマグナスの顔に苛立ちが滲む。それにエミリアは気付かなかつた。

「私たちは夫婦、ですけど…その、最初にマグナスが仰つたように恋愛関係ではありません。ですから私、思つたのです。友人関係だつたら築けるんじゃないかって。お互いを知って、悩みことも打ち明けてば上手くやっていけ——」

やっとマグナスの表情に気付いたエミリアは言葉を失つた。冷たい目に射抜かれ、体が硬直する。

そこで初めてエミリアは悟つたのだ——触れてはいけない線を越えてしまったのだと。

「だつたら今すぐに君を抱いて差し上げようか？」

マグナスの灰色の瞳は今や炎のように燃え上がりエミリアから体温

を奪っていく。声色は優しいのにひどく恐ろしい。体中の神経が逆立ち、おかしいほどに体が震える。

マグナスが椅子から立ち上がり一歩エミリアに近づく靴音が、まるで死刑宣告のようにも聞こえた。一歩、そしてまた一歩。

「い、嫌…いやです…来ないで」

「私を知りたいのだろう？男女を深く知るにはこれが一番だと思うがね」

エミリアの言葉を無視し、ゆつくりとだが確実に彼女を追い詰めていく足音。怖くて堪らないのにその目から逸らすことができない。やがて後退していたエミリアの体は遂に壁へと到達してしまった。マグナスがエミリアの顔の両脇に手をつき完全に逃げられなくなるまでに、数秒はあった筈なのに逃げることもさえ出来なかった。

まるで地面に根が張ったかのように動かない足。今にも崩れ落ちそうなのにそれも出来ない。

マグナスの指がエミリアの髪を梳く。固く目を瞑り怯えた顔をするエミリアの頬に舌を這わせる。重なった唇はあの夜よりもずっと冷たい。

あの時は少なくともマグナスはエミリアに熱を感じていた。だが今は違う。彼に宿るのはエミリアを憎いと思う気持ちだけ。

「何も考えなくていい。そうすれば痛みなど感じる余裕もないだろう」

マグナスの言葉が千本の矢になって胸を貫く。胸が痛い。どうしようもなく悲しい、苦しい。

エミリアの感情はそのまま涙となり絶え間なく頬を流れていった。それと同時に首筋にかかっていた息が遠ざかっていく。

「……これ以上私に関わらないでくれ」

マグナスが放ったのはたったそれだけだった。

エミリアが去っていった扉を見つめ、マグナスはひどく自分を責めた。いつもきらきらと輝きを放つ彼女の瞳から零れる涙は、こんなにもマグナスの胸を締め付ける。

自分で彼女を傷つけておきながら、同じ分だけ自分も傷ついている。マグナスの事情などエミリアは何も知らないのだ。だが彼女が言った“友情”という言葉はどうしてもマグナスの怒りを抑えられなかった。

椅子に体を預け天井を仰いだ。同じ模様が並ぶ高い天井はこうして歴代の当主たちの憂いの溜め息を吸い込んだのだろうか。

いつもそうだ。後悔するのは全てが終わってしまった後。許しを乞おうにもその対象は勝手にマグナスの前からいなくなる。

彼がそうであったように。

記憶の中の彼は決してマグナスを責めない。だが、一生マグナスを苦しめ続けるだろう。

「私を許せ——レオ」

その日の夕飯の席にも翌朝の朝食の席にもエミリアは現れなかった。昨日自分がしたことを思えば至極当然のことだが、空っぽの椅子が視界に入る度に深い溜め息をつかずにはいらなかった。ダニエルもエミリアがいないことを頻りに気にし、食事は殆ど皿の上に残ったままだ。

会話のない朝食がこんなに味気ないものだとは初めて知った。今まではそれが当たり前だったというのに。

この部屋にいる誰も何も言わないが、傍に控えているミセス・タリスからは何もかもお見通しだと言わんばかりの視線を向けられた。マグナスとエミリアの間にあったのはごく一般的な夫婦に持ちあがる問題ではないのだが。

確かに昨夜のマグナスの行いは決して褒められたものではない。彼女の言葉に怒り、それをぶつけたのはマグナスの未熟さだ。

エミリアはもう、マグナスの望む”ダニエルの母”としての役目を充分過ぎるほど果たしてくれたのではないか。それ以上に何かを望むのはあまりに身勝手なような気がした。――頭では分かっていたつもりでも、心はそれを許そうとはしないが。

マグナスは溜め息を吐くと、近くにいたネルソンを呼び寄せ何事かを告げ静かにダイニングルームを出ていった。エミリアと和解する必要があったのだ。

エミリアは清潔なシートの中で身動きした。一晚中目が冴えていた所為で、頭が鈍く痛む。いつもならばもうすでに起きて朝食を取っている時間だ。

瞳を閉じれば瞼にはマグナスの冷えた表情が浮かぶ。あれ程怒りを露わにした夫を初めて見た。掴まれた手首は鈍い痛みだけを残し、

マグナスの言葉は尖った針のように心を刺す。

——これ以上私に関わらないでくれ。

切実な声はマグナスの明らかな拒絶。エミリアがその心に少しでも触れることすら彼はよしとしないのだ。

そのことが何故か強引に迫られたことよりも悲しかった。一体自分は どうしてしまったのだろう、どうしてマグナスの行動一つにこうして胸を痛めなくてはいけないのだろう。

段々と深みに嵌っていく思考を、ドアをノックする音が現実へ引き戻した。一瞬マグナスかと思ったが、ドアの向こうから聞こえる声はドリーのものであった。

「奥様、入ってもよろしいでしょうか」

エミリアは返事をしなかったが、ドリーは恐る恐るといったように扉を開ける。ぴったりとカーテンが閉じられたままの部屋は薄暗く、もう陽も上っているというのに盛り上がったシーツにドリーは顔を顰めた。

「奥様、奥様、起きてください。気分が悪いようでしたらお医者様をお呼びいたしましょうか？」

医者という単語にエミリアは首を振った。医者になど見せたらたちまち健康であることが分かってしまう。エミリアはただほんの少し考える時間が欲しかっただけなのだ。

いつもならば考えられないほど緩慢な動きで支度をするエミリアとは反対に、シーツを剥がし洗面器に水を張るドリーの動きはとても機敏だ。一つ一つの動作に無駄がない。時々エミリアの様子を窺いながらも手を止めないのにはとても驚いた。

今日は薄い水色のドレスで、普段着るものよりも若干ゆったりとしたデザインに出来ている。髪は邪魔にならないように結われ、首筋

に僅かばかりの後れ毛を散らした。

「顔色が少し悪いようですが、本当にお医者様をお呼びしなくてよろしいのですか？」

「大丈夫よ、少し寝不足なだけだから」

自分に言い聞かせるようにして笑うと、鏡に映る顔もさつきよりかは明るく見える。ドリーは仕上げに肌にいいとされる薔薇の精油を匂いが気にならない程度に薄く塗ってくれた。

彼女の手にかかれれば誰もエミリアが元家庭教師だとは思わない。元々職業柄姿勢はよかったが、この数週間の特訓でそこに洗練さが加わった。

——指先一つでも貴婦人でなければなりません。マナーの講師はそう言った。

そうだ、最早私はエミリア・アンダーソンではない。ラザフォード卿夫人としてマグナスを支え、ダニエルに愛情を注ぐのが役目だ。その為には悩みなど抱えている場合ではない。

目を閉じて深呼吸をすると、胸の痛みも少しは取れたような気がする。ドリーに支度の礼を言い、エミリアは朝食を取る為に階下へと降りていった。

ダイニングにはエミリア一人の朝食が並んでいた。この時間だ、マグナスとダニエルはとくに食事を終えてしまったのだろう。

本来なら次の仕事に取り掛かれる時間だというのに、エミリアの為にメイドやシェフの時間が押してしまっている。そのことに申し訳なく思いながら席に着いた。

伯爵家に来てからというものの料理人たちの心のこもった料理はいつもエミリアの心を温かくさせる。野菜に果物も充実しており、食後にデザートもつく豪華さだ。

丁度エミリアがパンに手を伸ばした時、微かにドアが開いたのに気

がついた。その僅かな隙間から金色の髪が覗き、くりくりとした目が片方だけ部屋の様子を窺っている。

エミリアは咄嗟に何事もなかったかのように澄まし、メイドが運んできてくれたスープを食べ始めた。

「まあまあ、ダニエル様！」

しかしそんなエミリアの努力も、ミセス・タリスの威勢のいい声で水の泡と化してしまった。ダニエルはひどく不機嫌そうになっているが、ミセス・タリスはお構いなしにダニエルの手を引きエミリアの近くまでやってきた。

食事中の為ダニエルを抱き上げることは出来なかったが、それはミセス・タリスも分かっているようで給仕の者にエミリアの近くまで椅子を持ってこさせ、そこにダニエルを座らせた。

好奇心旺盛な瞳はエミリアの一挙一動を見逃すまいと忙しく動く。しかし人に見られていると食事がしずらいものだ。

エミリアは早々に食後のお茶を諦めざるを得なかった。

優秀な給仕たちはエミリアが立ち上がるのを見計らい椅子を引いてくれる。

「待たせてごめんなさいね、ダニエル。今日は昨日の続きからでよかったかしら？」

ダニエルの目が嬉しそうに輝く。

最近エミリアはダニエルと散歩をしながら、色々なものの名前を彼に教えている。ダニエルは本来好奇心旺盛で、頭がいいらしく何か疑問を見つけるとエミリアのドレスを引っ張り教えを乞うようになっている。

彼が一つずつ知識増やしていくと思うとエミリアは嬉しくて仕方がないのだ。レックスは大人しく後をついてくるだけで、まるで主人

の勉強の時間の邪魔はしないと云っているようだった。それでも少しでも休憩を取ると途端にダニエルにじゃれつくのだが。

「申し訳ございません。旦那様が外で待っていていらっしゃいますので奥様はそちらへ」

しかし、そのささやかな時間はネルソンの一言によって壊されてしまった。ダニエルはその言葉を聞くが否や顔を顰め、エミリアのドレスを強く握って後ろへ隠れる。

だが優秀な執事はこの家の主にどこまでも忠実だ。

「ナタリー、いるのだろうか？ダニエル様をお部屋へお連れしなさい。恐れ入りますが、奥様。ダニエル様とのお散歩はまたの機会に」

礼儀正しいが、この執事には何故だか逆らえないような気がする。未だドレスを掴んで離さないダニエルの頭を撫で、エミリアは溜め息を吐いた。

昨日の今日でマグナスが何の用があるというのだろうか。

ナタリーが早足で近づき今にも泣きそうなダニエルを抱き上げようとするが、一向にダニエルがエミリアから離れる気配はない。ナタリーが躍起になり小声でダニエルを窘めるが、それも上手くはいかなかった。

だがいつまでもこうしているわけにもいかない。エミリアはダニエルを抱くと額にキスを落とし言った。

「ダニエル、少しの間だけだからいい子で待っていてくれる？それまでナタリーと一緒に昨日の復習をしておいてね。全部覚えられたら、後でシェフにお菓子をつくってもらいましょうね」

その言葉にダニエルはしぶしぶといったように漸くナタリーの腕の

中に収まった。拗ねてしまったのか、エミリアの方は向かなかったが。

寂しく思いながら、ナタリーに連れられてダイニングルームを出ていく後姿を見つめた。少しずつ心を開き始めているダニエルとの約束は出来れば破りたくなかった。

こうなればできるだけ早くマグナスとの用事を終わらせるだけだわ。ネルソンの後に続きエミリアは密かに思った。

外に出るとからりと晴れた空がとても美しかった。風もそれほど強くはなく、この分なら午後になって急に天気が変わる心配はないだろう。

ポーチには何故か乗馬服に身を包んだマグナスと、美しい黒毛の馬それから賢そうな大型の犬が大人しく座っていた。

もしかしてどこかに出掛けるのだろうか？見送らせる為にエミリアを呼んだと考えられるが、それにしてもあまりに軽装過ぎる。様々は疑問を抱えたまま近づいて行くと、エミリアに気付いたマグナスが軽く頭を下げた。

「もしかしたら来てくれないとも思った。私よりダニエルを優先するのではないかとね」

「そうしたかったのですけれど、あなたの優秀な執事が許してくれませんでしたの」

「ああ、確かにネルソンは感謝したいくらい私に忠実だな」

皮肉たっぷりの言葉にもマグナスは怒った様子はなく、寧ろ微かな笑みさえ浮かべてエミリアを見ている。本当はもっと嫌味を言うつもりであつたのにすっかり毒気を抜かれてしまい、結局それ以上は言葉を紡げなかった。

「どちらかへお出掛けですか？」

エミリアの質問にマグナスはまたも驚くような言葉を口にする。

「君さえよければ、私と一緒に庭を見て回らないか。まだ全てを見たわけではないのだろう？」

私さえよければですって？エミリアは一瞬、自分の耳がどうかしてしまったのかと思った。なにしろ今までマグナスがこうしてエミリアの都合を聞いたことなどなかったからだ。

求婚の時も、この家に来てからもその後エミリアが反論こそすれどマグナスの要求は一方的なものであり、エミリアが彼に従うであろうという予測のもとに言葉にされていた。

しかし今エミリアの都合を聞くマグナスの表情はいつもの尊大なものではなかった。例えばエミリアが提案を拒否したとしても、マグナスは黙って受け入れてくれるような気がした。

これは彼なりの一種の贖罪なのだろうか。マグナスも昨日のことを気に病んでいるのだとしたらそれも頷ける。その申し入れを断る理由などエミリアにはなかった。

「よろこんで一緒にします。マグナス」

グレーの瞳が一瞬だけ光を帯びる。その様子は少しだけダニエルに似ていた。

やはりなんだかんだ言っても結局血の繋がった親子なのだと実感する。

マグナスはエミリアの近くまで馬を引いた。こんなに近くで馬を見たことがなかったエミリアは少々怖がりながらも、艶やかな黒毛と優しい目にすぐにその緊張を解いた。

鼻先を撫でてやると気持ちよさそうに嘶くのがとても可愛らしい。

それを見ていた犬もしつぽを振りながら元気よく吠える。

「ブルーノだ。足が速く、乗り心地も安定している。大人しい性格だから暴れることも殆どない。そっちのポインターはケリーという。嗅覚に優れ、体力がある。もちろん頭もいい。狩にはもってこいだ。今日は案内役に徹してもらおう」

マグナスの言葉が分かるかのようにブルーは名前を呼ばれるとエミリアの手に鼻先を押しつけ、ケリーはエミリアの回りをぐるぐると回った。

2匹ともマグナスに忠実なのだろう。彼が言うように狩の時には頼もしい相棒となりそうだ。

エミリアが触れても嫌がったりしないところできちんとしつけがされているのがよく分かる。交互に2匹を撫でながらそう思った。

馬に乗ったことがないと怖がるエミリアをマグナスは抱き上げ、ブルーノの背に乗せた。いつもよりもぐんと視界が高くなって体が縮むような気がしたが、背中にマグナスの体温を感じるとそれどころではなくなった。

エミリアを後ろから抱きかかえるようにして器用に手綱を操る。右へ、左へ、彼女が怖がらないように速度も一定のままだ。

前を歩くケリーが時折後ろを振り返っては、主人たちがきちんと着いてきているかを確認しているようだった。

「怖くはないか？」

「はい。風がとても気持ちいいです」

マグナスの問いにもそう答えるのが精一杯だ。彼の口調は今日とはことん優しくかった。威圧的ではないマグナスの声は、低く耳に響き心臓の鼓動を速める。

「噴水のところまでは行ったことがあるだろう。その隣が迷路になっているから、後でダニエルと遊ぶといい。私も子供の頃勉強を抜けたしては迷路に隠れていた」

「まあ、いけない生徒でしたのね」

初めて触れるマグナスの過去にエミリアは笑った。今までこんな風にマグナスが自分のことについて話してくれたことはなかったため、とても嬉しかった。

マグナスもそんなエミリアの笑顔を見て、自然と頬が緩むのが分かった。過去など無意味に等しいと常々思っていたが、誰かに語るものとしては多少なりとも価値があるように思えた。

幼いマグナスにとって庭の迷路は唯一の逃げ場所と言っても過言ではなかった。次代の伯爵として必要なことは物心ついた頃からことと叩きこまれたし、ある程度年齢がいくとすぐに学校へ入れられたし子供時代を語るには思い出があまりにも少ない。

そんな中で時々勉強を抜けだして訪れる庭は静かで気持ちがよかった。見たこともない虫や動物に触れ、たまに庭の手入れをしている男にあれこれ質問する時間が冷めた生活を潤していた。

すぐに父親に知れることとなり、きつい罰を与えられてからはそれもなくなくなってしまったが。

ダニエルに関しては庭を避難場所としてではなく、遊び場所として覚えていて欲しいと思った。今見ても庭師の作品は美しく見るものを飽きさせない。まさに”絵のような（ピクチャレスク）”と称するに相応しい。

「向こうに見えるのがオランジェリー、寒い冬にオレンジを育てる為のものだ。その向かいがキッチンガーデン、応接間に隣接しているのが温室だ」

マグナスの説明通りに視線を走らせて行く。一つの領主館にこれほど多くの建物があると、全体を見渡すのは難しいだろう。ただただ感嘆の溜め息しか零れない。

そんなエミリアを見てマグナスは悪戯っぽく笑うと言った。

「これくらいで驚いてしまつては困る。我が領地にはさらに素晴らしい場所があるのだから」

「それはどういう…きゃあ！」

エミリアの質問に答えるより早く、マグナスは突然馬を走らせた。後ろに倒れそうになったエミリアをマグナスの腕が支える。

漸く存分に走ることができた所為かブルーノもケリーもその足取りはとても軽い。

風が緩く編んだ髪を遊ばせるように吹く。蹄が地面を蹴る音、ケリーの吠える声、微かなマグナスの息遣い、それから自分の心臓の音。まるで全てを攫って行くかのように景色はどんどん流れていった。

マグナスの腕にしがみつくようにしてエミリアは出来るだけ息を整えるよう努力した。マグナスと領地に来る際に乗った馬車はちゃんと窓がついていた為ともに風を受けなかったし、もっと速度はゆっくりであつた。

息を吐き出す前に肺に空気が入ってくる。慣れないエミリアにはどう呼吸をしていいか分からない。ついに苦しくなつてマグナスに言おうかと迷っていると漸く速度が落ち、深呼吸ができるようになった。

「すまない、大丈夫か？」

心配げな声に精一杯の笑顔を作つて答えた。本当はまだ空気がどん

どん入ってくる感覚が抜けなかったのだが、あと少ししたらそれも治まるだろう。

来る時と同じようにマグナスに抱かれ馬を降りたエミリアは、目の前に広がる光景に言葉を失った。

そこにあつたのは邸のように人工的に作られたものではない、自然の木や植物だった。薄い紫、黄色、白などの花や葉の細い植物、年代を感じるどつしりとした木には蔦が絡まり、青々とした緑が目にも鮮やかだ。その向こうには川が流れており、水音が耳に心地いい。早速ケリーが川に近づき水を飲み始めた。

ブルーノの手綱を手近な木に縛り付け、マグナスはエミリアの手を引き少し離れた場所まで連れていった。真っ白な花をつけた木は堂々とそこに立ち、風に揺られる度に花弁が空中に舞った。

「リンゴの木だ。もう少しすれば実をつける。私の祖父が祖母の為にここに植えたらしい」

「どうして私をここへ？」

一瞬の躊躇いの後、マグナスはエミリアの両手を取った。

指先が熱いと感じるのはマグナスの所為ではなく、自分の体温が上昇したためなのだろうか。

「昨夜の許しを乞いに。エミリア、私を許してくれるか？」

マグナスの瞳は真剣だった。真っ直ぐにエミリアを見つめ、真摯に問う姿にエミリアの鼓動がまた一つ速まった。

指先を包む手に少しだけ力を込め、エミリアもまたマグナスを正面から見つめた。グレーの瞳の中にエミリアの顔がはつきりと映る。

「あなたを許します、マグナス。私こそ無神経なことを言ってしまい申し訳ありません」

2人の顔に自然な笑みが浮かぶ。

「私たち、やはりいいお友達になれそうですね」

「ああ、私もそう思う」

エミリアの言葉にマグナスはほんの少しだけ痛みを覚え、マグナスの微笑みにエミリアはときめく心を隠せなかった。

だがそれは口にするにはあまりに淡い感情で、自身の中にあるプライドと追いつかない気持ちが彼らから言葉を奪った。

言ってしまうばそこで何かが終わりのような気がしたのかもしれない。

マグナスとエミリアはお互い不可解な感情を押し殺し、僅かな嘘を笑顔に乗せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069q/>

灼熱の氷

2011年8月16日05時47分発行